

蘭学における発達概念の導入について

——堀内寛『幼幼精義』（1843・天保14年開雕）まで——

田 中 昌 人

On the Introduction of the Concept “Ontwikkeling” in Japan

—— In Dutch Studies from 1743 to 1843 ——

TANAKA Masato

日本において、発達という語が development などに対応した近代的、国際的な概念の一つとして登場し、そこに日本の近代化に求められた特別な意味が加えられていくための期間として、一先ず幕末明治期からの約4分の1世紀を要したことが明らかとなってきた¹⁾。さらに最近の調査によって、その近代的な概念の導入を準備したものがいわゆる英学以前の蘭学にあることを証明する資料が揃ってきたので、本稿および次稿ではその紹介と検討を行う。

1 Ontwikkeling への道 —— 接頭辞 ont の研究 ——

1) 青木昆陽の場合^{2,3)}

青木昆陽（1698～1769）は、伊藤東涯に儒学を学び、『蕃薯考』（1735）を著し、書物御用・写物御用に登用され、さらに1740・元文5年頃、八代将軍吉宗からオランダ語学習の内命を受けたとされる。彼は1742・寛保2年以後、江戸参府のオランダ人や通詞からオランダ語を学んで稿本を残している。『和蘭貨幣考』（1742）が日本における公認の最初のオランダ文字を記した著作で、経済への着眼が注目される。

彼の著述の様式はオランダ語を筆記体で著し、片仮名で発音を付し、訳をつけ、成句はその後に一語ずつ単語を解して文意をまとめるという手法を採用している。翌年の『和蘭話譯』（1743・寛保3年）には次の成句が収録されている。「イク ヘッピ ユーウェ デ エールステケール ゲシーン ドグ ヘルスクラ メット ik heb úw de eerstekeer gesien dog versoeek met メイッ フレンスカップ ウェルト ホウデン mijn vrúndschap welt houden」続けて各語が説明されている。houden のところは、「ウェルトホウデンハ助語也」という具合である。そして文意について、「コレハ、初テ御目ニ懸リ申候、以後ハ心安クイタスベキト云コトナリ」とまとめられている。houden の語は対訳されていない。

3年後に作成された『和蘭文字略考』（1746・延享3年）の「卷之二」には「覺 onthouden ラントホウデン」と訳されている。しかし、ここでは『和蘭話譯』で用いられた houden が『和蘭文字略考』にある onthouden になると、その意味がどう変わるのかについての考察はない。まだ、

一語、一語に訳がつけられている段階であって、その他の語にも、例えば今日の動詞などの語幹に共通性がある時に、そこに接頭辞や接尾辞が加えられると、その語がどんな性格をもってきたり、意味が変わるのかについてまでの説明が進められるには至っていなかった。けれども、さらにその翌年に作成された『和蘭文訳 六集』（1754・宝暦4年）の「Oノ部」になると、
ワントビンディンキ「ontbinding（人ノ臟腑ヲトク）、ワントハンゲンontfangen（ウケトル）、ワントケンネンontkennen（ウツリヤル、トドクル）、ワントケレーデンontkleden（衣服ヲヌグ）、ワントコノーベンontknopen（ムスピメヲトク）、ワントステイキテンontstigten（縫ヲトク）」がでてくる。ここで注目されるのは、ontに「トク、トル」の意味が与えられ始めていることである。

2) 前野良澤の場合^{4,5)}

前野良澤（1723～1803）は青木昆陽にオランダ語を学び、師亡き後、長崎に遊学して通詞からオランダ語を習い、マーリン（Marin, P.）の辞書^{1)-④}やクルムス（Kulmus, J. A.）の『Anatomische Tabellen』（1722）のディクティン（Dicten, D. G.）による蘭訳本『Ontleedkundige Tafelen』（1734）などを求めて帰り、杉田玄白らとオランダ語の学習をしながら『解体新書』（1774・安永3年）の訳出に貢献をしたとされる⁴¹⁾。

彼の口述筆記をもとにした『蘭譯筌』（1771・明和8年）と『和蘭譯筌』（1785・天明5年）には、青木昆陽『和蘭話譯』（1743）に収録されていた houden と、『和蘭文字略考』（1746）に採録されていた onthouden が収められている。ただし、houden は『蘭譯筌』の「語類」では「houdrn」、『和蘭譯筌』の「言類」では「houdon 保」といずれも誤綴されており、「譯言類」では「ハウテン グモツ 保」となっている。その他に成句があり、『蘭譯筌』には17句、『和蘭譯筌』には22句が採録されている。内、8句は双方共通である。その中に onthouden を含む「Veel vraagen en wel onthouden」がある。これに対する訳として『蘭譯筌』では「多學^フ能^ト識^ス（学生ノ業ヲ云フ常言ナリ）」が、『和蘭譯筌』では「多^フ問^ト与^ト能^ト識^ス（是學生ノ業ヲ云フ常言ナリ）」があたえられている。「譯語類」には「オントハウデン 識」がみられるが、この段階でもここでの接頭辞 ont の役割が理解されていたのかどうかに関してはなお明らかでない。ただし、杉田玄白と共に訳した『Ontleedkundige Tafelen』を『解体新書』（1774）としたことは、青木昆陽『和蘭文訳 六集』（1754）で ont に始まる語に「トク」の意が与えられ始めていたことと共に念頭におかれなければならないことであろう。

事実、彼は青木昆陽の場合のように語の対訳を基本とするだけでなく、長崎での学習をもとに語の意味をとらえるために語の構造的な検討を行い、さらに限られた語に関してとはいえ、同義語についての考察を残している。例えば、前野良澤が翻譯して山村才助が筆授したとされる『仁言私説』（1790・寛政2年）などにそれをみることができる。『仁言私説』の最初には barmhartig が取り上げられており、同義語として medoogend と verdraagzaam が、「補」として genadig, goedertieren, bermhertigh, ontfermigh, ontfermhertigh があげられている。ここまではオランダ語の辞書によると思われるが、語の構造分析を試みて次のようにのべている。「私説ニ曰 barm ハ魚名ニシテ本言ニ与ル所ナシ古言ヲ考ルニ barmen ト云アリ其説ニ云ク bear-men ノ意ナリト arm ハ困窮ナリ be ヲ加レハ己ニ困シテ己窮レリト云義ナリ en ト尾聲ヲ轉スレハ彼ヲ救フノ意トナリ則憐愍ト訳スヘシ意フニ本言ノ barm ハ此義ヲ用ルナルヘシ ○ hart ハ本、心臓ヲ云通シテ心念トス ig ヲ添フル者別義アリ今ハ事ニ感シテ發動スルカ為ニ尾音ヲ轉スル者ナリ

○ 右二言合シテ心常ニ存_レ愛憐撫育_ノノ意トナル益其心愛人利物ノ為ニ發動スルモノナリ
 ○**〔釈言〕** 其一ハ仁ノ義ナリ其二ハ忠恕ノ義ナリ其三己下五言（前頁「補」の5個のオランダ語——田中註）ハ皆仁ト訳スヘシ」とされている。さらに、ontfermbertig については Marin, P. の辞書^{1)-④}をもとに「是衆人ノ憂苦ヲ憫ムノ義ナリ」とし、ontfermig の方は Kilianus の辞書^{1)-④}をもとに「igノ字ヲ以轉声スルトキハ愛人利物ノ徳ノ義トナル」とした上で、どちらにも「譯曰仁」をあてている。長崎通詞吉雄幸左衛門らの教えを受けて、青木昆陽にくらべると語意についての論究が進んでいる。このような考察を行ったのは、江戸の蘭学者としては彼が最初であり、その努力が『解體新書』の訳出を可能にしていっただけでもあろう。それでもまだ、ont を取り出しての解明は行われていない。『仁言私説』を作成した1790・寛政2年は、幕府が聖堂で朱子学以外の学問を行うことを厳禁するなど学問の統制を強化した年である。その下で朱子学における「仁」に関してであったとはいえ、オランダ語について解明を進めた貢献は貴重であろう。

3) 大槻玄澤の場合^{6,7)}

前野良澤の門下生であった大槻玄澤（1757～1827）は、建部清庵に医学を学んだ後、杉田玄白に医学を、前野良澤のもとで蘭学を修めた。さらに長崎に遊学して、1786・天明6年には江戸で芝蘭堂を開いて蘭学教育の中心的役割を果たすことになったとされている。その後、1811・文化8年に、幕府の天文方に蛮書和解御用が設けられると、後に取り上げる馬場貞由とともに訳員となり、ショメール（Chomel, N.）の百科辞典『Huishoudelijk Woordenboek』（1778）の翻訳にあたることになった。この間に、多くの著書や訳書、さらに草稿を記してそれが残されている。

彼が芝蘭堂を開いた初期の刊本に『蘭学階梯』（1788・天明8年）がある。その「巻下」には「転釋」の節が設けられて、次のようにのべられている。すなわち、「其首尾ニ添ルト云フハ、仮令バ、be, ge, ver, ont, uit, af, aan, lijk, heid 等ナリ」として、これが語幹の首部あるいは尾部に加えられることによって「其意義ヲ転ズルコト甚多シ。今委ク是ヲ説キ尽ストイフトモ、初学ハ却テ茫洋トシテ通ジガタキコトナレバ、余ハ姑クコレヲ略ス。成書ニ就テコレヲ読ムノ間回復玩味スレバ、自ラ了解スルコトナリ」と指摘されている。ont についてはまだ例示がない。しかも、これらをアルファベット順にあげるのではなく、さらに語の首部について意味を転ずる接頭辞と尾部について形容詞や名詞にかえる接尾辞がひとまとめにされているなど、整理がなされているとはいい難い転釋の説明である。

しかし彼の場合、後になると転釋を示す語のそれぞれに説明が加えられるようになっている。大槻玄澤の口述、『蘭譯要訣』（時期未詳）は『蘭學階梯』より後とみられているが、その中で ont について、次のようにのべられている。「冠語 ont, ノ語意未詳トイヘトモコレマテアルモノノ所ヲ更ヘル意又アルモノノナクナル義アリ假令ハ onthoofd, ハ顛ルナリアルモノヲナクスルナリ ontleding, ontwrigting, ノ類ミナ所ヲカエルナリ bloot, ハ「^{ハズカ}裸」ナリ ontbloot, ハ裼体ナリ今マデ身ニツイテアルモノヲヌギステ丸裸トナル如此ノ意味アリ又事ノ甚シクナルヨウナル事ニモナル假令 steeking, ハ如刺又火ヲ熨スルコトモ云火ヲ点シ如刺モノ甚シクナル故如燒 ontsteeking 熨痛ノ意トナル又 kennen, ハ知ナリ自利ナリ ontkennen ハ明カナリ知ル事カ甚クナルユヘ明ノ意ニナル如此ノ類ニテ未タ其語意ヲ熨シ得ガタシ」と。

これは、著作の中で接頭辞の ont が論じられた最初のものではなかろうか。ここでは、ont の語意は未詳であるとしても、これが語頭にくることによって、「コレマテアルモノノ所ヲ更ヘル意又アルモノノナクナル義アリ」とか、又「事ノ甚シクナルヨウナル事ニモナル」として検討が加えられていることが注目される。また、彼には晩年の作として『重訂解體新書』（1826・文政9年）があり、この「卷之十二 附録下」のところで「解體」を「翁多列乙鐸」の訳であるとして、漢学者から解體の語の誤用が指摘されたことに対して、中国の古典の用例をもとに吟味をしているところがある。もっともここでは必ずしもオランダ語の方の説明ではなく、訳語である「解體」の用法が適切かどうかの吟味が行われているのであるが。

杉本つとむは、富士谷成章が日本語の『挿頭抄』（1767・明和4年）を著したのは前野良澤が『蘭譯筌』を作成する前であり、『脚結抄』（1773・安永2年）も『解體新書』の前に成っていることを指摘している⁸⁾。日本語の「挿頭脚結をもて、ことばをたくす」という語の理解のしかたは、これ以後蘭語学を修める者にとっても注目されていくことになったことであろうと指摘されている。

なお、大槻玄澤の門下生からは『波留麻和解』を編集した稲村三伯や次に取り上げる宇田川玄隨や後に取り上げる宇田川玄真などが出ている。

4) 宇田川玄隨の場合^{9,10)}

宇田川玄隨（1755～1797）は、漢学に秀で、漢方を学んだが、さらに前野良澤の門下でオランダ語を学び、大槻玄澤にすすめられて杉田玄白や桂川甫周、大槻玄澤らについて蘭医学を学んだとされる。その後『西洋醫言』（1792・寛政4年）を撰しつづつ、わが国最初の西洋内科書として、ゴルテル（Gorter, J.）の内科書を『西説内科撰要』（1793・寛政5年）として刊行している。これが刊行され始めた時に『蘭譯弁髦』「卷之下」（1793・寛政5年）も作成している^{9)-①}。

『西洋醫言』（1792）の「卷下」,「釋言第十八」には ont のつく語が二つあがっている。「翁篤^{フント}ステル^{レン}ハ^ハ (ontstellen)。驚ク也。」「翁篤^{フント}福^ホ烏^ウ甸^{デン} (onthouden)。傑^ゲ訥^{ヘス}健^{ウゲン} (geheügen)。墨^メ模^{キウ}利^{リイ}ハ^ハ (memorie)。記憶也。」「翁篤^{フント}福^ホ烏^ウ甸^{デン} (onthouden)。弗^フ爾^ル皮^ピ甸^{デン}ハ^ハ (verbieden)。禁^キ戒^{ゲイ}也。」ont の漢字が大槻玄澤の「翁多」に対して、宇田川玄隨は「翁篤」を用いている。さらにこれまで onthouden には1つの訳がつけられてきたが、ここに至って「記憶」と「禁戒」の2つの訳が区別され、それぞれに類語がつけられている。しかもこの2つの訳は、その後、作成された稲村三伯『波留麻和解』（1796）や Doeff, H.『(道譯法兎馬)』（1833）においても区別してつけられることなく、桂川甫周『和蘭字彙』（1855～1858）の段階になって採用されることになるのである。いち早く彼の場合に採用された厳密な比較検討の方法は接頭辞についても適用された。

『蘭譯弁髦』（1793）の ont にも次のように記されているところがある。すなわち、ontstaan に関して「定リタル事ナク発シキタル意ナリ故ニ多ク uit ト連用スルナリ」とのべ、医学において症状を理解する上で必要なものとして、ont などの意味を正しく認識するための努力をしている。これらは大槻玄澤の『蘭譯要訣』にあった steeking と ontsteeking の関係が説明され始めていたものを宇田川玄隨が受け取め、さらに慎重に吟味を重ねているものとみることができる。

宇田川玄隨の『蘭學秘藏』（時期未詳）は、杉本つとむによると、マーリン（Marin, P.）の書などをもとに考察が加えられたものとされており、そこには「單語ノ首ニ ont on be ver ノ類ア

ルモノアリ其後ヘニ□e□^{セル イグ イング ヘイド レイキ} sel ig ing heid lijk ag□ig baar □□□ノ類アリ」と記されている。但し、この文は次項の『(柳園中野先生文法)』と同文である。

いま一つ注目されることは、この書の成句の訳として、前野良澤の『蘭譯筌』(1771)、『和蘭譯筌』(1785)の中にあった次の句が改めて取りあげられていることである。

「Veel vraagen en wel ont^{問ケハ}houden^{ヨク ナシ}, haastig spoed is zelden goed」そして大槻玄澤の提案をもとに、これが「へールハ多ナリフラーゲン者問ナリウエル者能也ヲントホウデン者得也領解スルナリ能ク得ル事ハ必ス多ク問ニ在リト言フ意ナリ」とされている。ここでは ont が houden の意を転ずるものであることがわかって、ont の次に返り点がつけられて、ont に「ナシ」の訳がつけられている。さらに単に転ずるだけでなく、大槻玄澤が『蘭譯要訣』で ontkennen に関しては、「自利」であるので「甚クナルユヘ」に「知」が「明」になるとして理解したのと同じく、保つ事が「甚クナルユヘ」に能く得て領解することになるとして意味が把握されている。

これによって、彼らには ont の理解には2つの水準における吟味が求められていることが経験則的にはあれ認識され始めていたことが指摘できよう。1つは、青木昆陽の『和蘭文訳』の語訳の場合のように、「臍腑ヲトク」、「衣服ヲヌグ」、「ムスピメヲトク」、「縫ヲトク」などとした場合、ont の意味が「トク」行為自体に置かれて、具体的な行為をすることによって意味が完結するとみられることがある。それを機械的に onthouden にあてはめると、保っていた状態を失うことなどと解して終りかねない。これは ont の表面的理解である。『和蘭文訳』の語訳例の場合のように直接的な対象的行為としてその意味を把握しなければならない場合はある。しかし、2つには、それだけではなく、あるいはそれにとどまらず、間接的な対象的行為において、さらに現象を認識していくより本質的認識において、その意味を把握しなければならない場合がある。ont の本質的理解が求められる場合である。この成句の場合、前提となる行為によって得られた事実によって、それまで保たれていた状態をより本質的なところから変えて、新しい認識を得るに至るところに達するまでを含めて ont が用いられている。この場合、ont の本質的理解にまで達していないと、他動詞 onthouden の意味をより深く把握して訳をすることができない。

事実、この語の訳には、時代がやや下っても、いったん表面的な間違った訳をつけて、その後で改めている例などが残されている。石川玄林の手稿『蘭語口授』(1825・文政8年)には、「onthouden 忘ル」となって、その後、「忘ル」を抹消して「ヲホエル」としている¹¹⁾。houden を「保つ」として、それを表面的に「解く」ことによって「忘れる」と誤解してしまったのであろう。「自利」の場合、「保つ」ことが甚しくなるゆえに、さらに本来の「忘れずにいる」、「記憶する」、「覚える」、「識る」、「領解する」となるべきところをそうではない反対の意味の誤訳をしてしまうことがある例といえよう。ここには、ont を表面的に把握することによって反って正しい理解ができなくなる場合に注意を払う必要が生じ始めてきていたことが示されている。

青木昆陽の場合、『和蘭文字略考』(1746)では onthouden に「覺」の対訳がされていた。しかし、それはまだ ont の意味を把握した上でのものではなかったとみられる。前野良澤によって、『蘭譯筌』で取り上げられた成句の中で「識」の訳がつけられ、以来、大槻玄澤によって、ont などに「意義ヲ転ズルコト」があるが「茫洋トシテ通ジガタキコト」もあるとされてきたものが、明瞭に理解されて訳がつけられたといえよう。すなわち、宇田川玄隨に至って、大槻玄澤と検討を重ねることによって他動詞 onthouden についても、これまで「覺」、「識」などとなっていたものを「自

利」の語に ont が付いた場合に求められる本質的理解に達して「領解スルナリ」とするまでになっている。さらに今日でいう直訳をした後、「能ク得ル事ハ必ス多ク問ニ在リト言フ意ナリ」と、可逆的思考を行って文意を確かめている。これは『蘭學秘蔵』に「佳語」の1つとして収められている翻訳例なのであって、共同討議によって達した会心の秀訳でもあり、蘭学者自身の実践的教訓を納得させつつ、「自利」の他動詞の場合に関して本質的理解に達したのものであろう。これらの本質的理解の水準に達した語はまだ限定されていたかもしれないが、宇田川玄隨の場合、『西説内科撰要』の翻訳を続ける一方、蘭語学の検討も行い、それまで発語辞などとされていた lidwoord を冠詞あるいは冠字としたり、voorzetfels に関しても考察を加えるなどしている。これらのところには宇田川玄隨らがオランダ医学を基礎に、語彙等に関して一層厳密な科学的理解に達することに努め始めていたのを見ることができる。彼の蘭語学には医を通じての救民の使命感に根ざしたものが脈打っており、そこには当時としての漢学も含めた学問的成果が結実しているのであって、それはさらに宇田川玄真や宇田川裕庵にも継承・発展されていくことになった。

5) 中野柳圃の場合^{12,13)}

大槻玄澤は後期の作である『蘭譯梯航』(1816・文化13年)の「卷之下」で、「天明ノ初年、長崎ニ於テ、中野柳圃トイフ人ヨリシテ其(蘭訳——田中註)正法起レリ」として、それまでの蘭訳が文法に通じていなかったことを認め、その要領を得ている元通詞の中野柳圃に教えを受け、『助詞考』、『蘭学生前父』などの秘書を授けられて正法が拡まったことを記している。この正法を得るに至るまでも長崎の蘭通詞たちが蘭語学や蘭学を修める上で行った努力、そして江戸その他の蘭学者たちに貢献をした業績は大きいとされているのであって、これまで指摘されているだけでも今村英生、吉雄耕牛、西善三郎、木木良永らの業績がある^{13)-⑥}。ここでは、次に長崎蘭通詞の学問的成果を体現し、蘭語学をふくむ蘭学を発展させつつ時代的要請に応えた中野柳圃(志筑忠雄)とそれに続く馬場貞由を取り上げて考察を進める。

中野柳圃(1760~1806)の場合に注目されることは、配字をもとに訳すだけでなく、詞性と綴詞などを学び、それによって訳に誤りのないようにすることの大切さをのべて、これまで以上に、より広く語学的な検討を行っていることである。そこでは、これまで取り上げてきた語幹の首部あるいは尾部に接する語にも着目すべきことがのべられて吟味が進められているので、そこを中心に論述する。

杉本つとむによると、中野柳圃の場合には、荻生徂徠の言語論をもとにした国語学における文法研究の成果が反映しており、セウエル(Sewel, W.)やマーリン(Marin, P.)、ハルマ(Halma, F.)などのオランダ語の文典や辞書^{1)-④}を参考にしながら、それを日本語の文法を介して理解をしようとしたところにその特徴がみられるとされる。事実、中野柳圃は和学をもとに品詞(品詞)の考察を重ねている。すなわち、『助詞考』(時期未詳)などによると、実詞と死詞(これには動と静とがある)を虚活詞と区別して、虚活詞は静と動に、動はさらに自と他に区分するなどしていた。やや後になると、例えば「動詞ヲ死用セルモノ ing ヲ帶フ」(『助詞考』)という具合に、活詞の名称を動詞に変えて、これを動かないようにする接尾辞としての ing についての考察も行っている。また、『蘭学生前父』(時期未詳)では、品詞を発声詞(冠詞——以下、括弧内は今日の名称——田中註)——これには名詞と関連して陽詞、陰詞、中詞がある——;実詞、自

体詞、虚静死詞、その他（名詞）——これには衆詞、復詞、独詞がある——；虚詞、静虚詞、虚静活詞、その他（形容詞）；代名詞；活詞、活動詞（動詞）——これには動他詞と自動詞などがある——；嘆息詞に区分し、これら以外のさまざまなものを助詞に含めている。助詞に関しては、相前後した時期に、その中には活詞あるいは実詞の意味を転じ、あるいはその性格を変えるものがあるので、正しく理解をしなければ翻訳はできないと考えて各著作で論究が行われていったようである。『助詞考』でも、先の助詞とは別にその中から慢詞が取り出されている。この慢詞という用語は杉本つとむによると、荻生徂徠が『訓譯示蒙』の「字勢」で「慢ハ意ノブラリトシタル字ナリ辺傍時際処ナドヤウノ字ナリ」とのべているものが参考にされて用いられたのではないかとされている^{13)~⑥}。ところで、『虚詞考』（時期未詳）においては voorzetzels を「実字ノウヘニオク慢詞」として、これには、分離して用いることができる場合と分離できない場合があるとのべ、後者の例に「ant, aan, be, ge, er, uit, on, ont, toe, ver, wan」をあげて、toe には分離の場合もあるとしている。

さらに『蘭語九品集』（時期未詳）では、voorzetzels に「所在詞」の名称が与えられ、これは「変化セサルノ詞ニシテ實静詞ノ頭ニ冠ラシ亦或ハ後ニ属スルノ詞ナリ即チ場ノ処及时刻ヲ指スモノ」として他とは区別され、ここには、aan, ashter, of, bij などがまとめられて、その群には ont など語幹の意味を転ずる不分離の辞は含まれることがなくなっている。こうして、助詞から慢詞が、慢詞から所在詞（前置詞）が分離されて、なお残った不分離の「頭ニ冠ラシ亦或ハ其後ニ属スルノ詞」が取り出されて説明されるに至った。

『（柳圃中野先生文法）』（時期未詳）では次のようにのべられている。この部分は前項で取り上げた字田川玄隨『蘭学秘藏』（時期未詳）と同文である。「単語ノ首ニ ont, on, be, ver, ノ類アルモノアリ其後ニ er, sel, ig, ing, heid, lijk, achtig, baar, dig ノ類アリ唯 be, ver, ニツハ常例ナキニ似タリ ont 或ハ其語ニ反シ或類ス ontkleeden ハ反ス ontkomen ハ類ス蓋シ其意陽氣アリ故ニ開出發意也 onbequaam ノ類也但シ ont ハ為事語ニツキ on ハ傍寄名語ニツクモノ也」, 「ing, heid モ其意少シ異也何モ語ヲ轉シテ自立名語トナスモノ也但シ ing 多クハ事語ニ附ク假令ハ zwymen ヲ zwyming トナシ huiyshouden ヲ huiyshouiding トナス是家ヲ保ツヲ轉シテ家ヲ保ツ事ト云語ニナス也我能ク家ヲ保タント云事ハ huiyshouden 也家ヲ保ツ事ヲ学フト云フ事ハ huiyshouiding 也（以下略）」と。為事語は今日でいう動詞であり、傍寄名語は形容詞、自立名語は名詞である。これらは中野柳圃が初期に訳出考察した品詞名とみられる。後に彼の論究を経て為事語は活詞、傍寄名語は虚詞、自立名語は実詞になっていく。huiyshouden はこれまで取り上げてきた houden と onthouden の検討に加えられてよいものである。これは1811・文化8年になると大槻玄澤、馬場貞由他によって翻訳にとりくまれるショメール (Chomel, N.) の『Huishoudelijk Woordenboek』（1778）の書名にあらわれてくる語でもある。この『（柳圃中野先生文法）』は比較的初期にセウエル (Sewel, W.), マーリン (Marin, P.), ハルマ (Halma, F.) のものをもとに訳出考察したものとみられ、これ以後、荻生徂徠のものを取り入れて、体系化が試みられることになったものであろう。そこでなお今一度、助詞から慢詞、さらに所在詞が抽出され、あいまいさを残しながらも「単語ノ首ニ」とか「頭ニ冠ラシ」、あるいは「単語ノ後ニ」とか「後ニ属スルノ詞」として不分離語群が残されて検討されていくことになったとみられる。

中野柳圃の論究過程は、吉雄俊藏 (1787~1873) の『六格明辨』, 『三種考』, 『譯規』（いずれ

も時期未詳)などに荻生徂徠の用語で中野柳圃が用いたものが引き継がれ、「慢詞」,「処前詞」として引き続き検討されていくことになる。また、野呂天然(1764~1834)は『九品詞略』(時期未詳)によって、voorzetselsを「慢詞」,「指示詞」として、その一つを「前之意置クモノ詞」(前置詞),いま一つを「連用慢詞」,「連接指示詞」としている。後者は「分裂無キ前置」(接頭辞)である。これには「ant, aal, be, ge, er, her, on, ont, toe, ver, wan」があるとして、但し、toeに関しては「分用スルコトアリ」と註記されている。これも引き継がれていった方向であろう。

このように、中野柳圃らによって助詞から慢詞が、さらに所在詞が分離されて、改めて不分離の語の「頭ニ冠ラシ」,「後ニ属スルノ詞」の特徴が吟味の対象となってきたことは重要である。ここにはオランダにおけるオランダ語文法の研究の発展を反映させることができているとともに、それを当時における和学の発展をふまえて考察しているところが貴重といえよう。この成果はさらに長崎通詞馬場貞由によって引き継がれ、吟味され、オランダ語文法の学習や翻訳の正法を発展させていくことになったとみられる。

6) 馬場貞由の場合^{14,15)}

馬場貞由(1787~1822)は、中野柳圃にオランダ語を学び、長崎商館長ゾーフ(Doeff, H.)からはオランダ語とフランス語を、商館員ブロムホフ(Blomhoff, J.C.)からは英語を、ロシアの軍艦ディアナ号の艦長ゴロウニン(Golovnin, V.M.)からはロシア語を学んだとされる。1811・文化8年には天文台の蕃書和解御用となってショメール(Chomel, N.)の『厚生新編』訳出の中心となってつくした。彼は中野柳圃の語の解法をさらに進めた1人とされている。彼の蘭語学に関しては『蘭語首尾接詞考』(1808・文化5年),『西文規範』(1811・文化8年),『和蘭文範摘要』(1814・文化11年),『蘭學梯航』(1816・文化13年),『蘭語冠履辞考』(1855・安政2年——後世の刊行)などがある。本稿では、この内、首尾接詞に関する論考の発展を中心に取り上げる。

『蘭語首尾接詞考』(1808)の「巻之上 凡例」では次のようにのべられている。「一、此書ニ載スル物ハ一語ヲ以テ解ヲ為スベキ助詞ノ類ニ非ス全詞ノ首尾ニ附属シテ一語ト為シ或ハ実詞ヲ虚詞トナシ虚詞ヲ実詞トナシ又其義ハ同譯ナレトモ其意味輕重アルガ如シ又轉譯シテ其義ヲ異ニスル物アリ」と。ここでは、はっきりと当時の助詞とは区別をして取り扱う必要があることが指摘されている。次に「一、首詞ノ如ク見ユレトモ然ラサルモノアリ」としてbeを例にあげて説明をしている。その後に「一、全篇載スル所ハ蘭詞ノ首尾ニ附属シテ運用ヲナスノ諸語其義解スベク解スベカラサル物多シ今強テ其要略ヲ解シ首詞尾詞ノ二ヲ分別シ和蘭斯文ノ幼學ニ視ス敢テ大方ニ視スニハ非サル也後者謬誤ヲ正シテ可ナリ」と記して次の21種をあげて説明をしている。取り上げられている順に記すと、toe, af, op, onder, tegen, voort, bij, door, om, over, na, aan, her, ver, on, ont, be, ge, wan, in, uijt, である。まだ首詞と尾詞が分類記述されておらず、アルファベット順でもない。しかし、本質的理解へ進む一步として、彼のいう二種の検討が行われている。ontに関しては次の如くである。

「ontハ脱去又披露ノ意アル詞ナリ但シ脱去ノ意ニマタ二種アリ其一ハ味方ノ者ヲ脱去スルアリ其一ハ敵方ノモノヲ脱去スルアリ譬ヘバ keleeden ハ衣服ヲ着ルナリ ontkeleeden ハ衣服ヲ脱グナリコレ我ガ味方ノ者ヲ脱去スルナリ又 vangen ハ取ル或ハ捕フルトモ訳ス ontvangen ハ請取ト訳スコレ敵ノモノヲ脱シテ而シテ我方ニ取ル意ナリ故ニ請取ノ意トナラン」と論じている。さら

に青木昆陽の『和蘭話譯』にみられた houden と『和蘭文字略考』にみられた onthouden に関しては次のように述べられていることが注目される。「houden ハ保ツト訳ス onthouden ハ記憶スル覺ユルト訳スコレモ ontvangen ノ類ニシテ他ニ保ツモノヲ脱シテ而シテ我モノニスル意味ナリ因テ記憶スル又覺ユルノ訳ヲスル haalen ハ取りヨスル又取ルト訳ス namen ノ取ルトハ別ナリコレハ手近クアル物ヲ手ニ取ルナリ haalen ハ隔タル所ニアルモノヲ行テ取ルナリ onthalen ハ饜饜スルト訳スコレ他ニ属セル者ヲ脱シ来テ其處ニ顯ワスノ意故ニモテナスノ意ニナルカ追考ス可」と。大槻玄澤らは「自利」の他動詞の場合に「事ノ甚シクナルヨウナル事ニモナル」ゆえにとして本質的理解に導いていたが、馬場貞由は「他ニ保ツモノヲ脱シテ而シテ我モノニスル」との説明によって、表面的理解から本質的理解への橋渡しをしているのを見ることが出来る。ただし、onthouden についていえば宇田川玄隨がつけたもう一つの訳である「禁戒」の方にはふれられていない。

「卷之下」には尾詞が22種あげられている。heid, agtig, baar, waardig, lijk, zaam, hande, leij, zints, zins, te, ste, st, er, zel, de, ig, lig, ing, ling, schap, schappij がそれである。ing には次の説明がある。「ing ハ動詞ニ附テ実詞ニ為スモノナリ假令ヘバ twijffelen 疑フト訳ス verlossen 免ルルト譯ス共ニ動詞ナリ今 ing ヲ付テ twijffeling トスレバ疑ヒト訳ス verlossing トスレバ免シト譯ス皆実詞トナスナリ」と記されている。

中野柳圃において「所在詞」として「頭ニ冠ラシ」, 「後ニ属スル」とされ、吉雄俊藏において「処前詞」, 野呂天然において「連接指示詞」としてそれぞれ前置詞と接頭語がわけられてきていたものを、馬場貞由はそれまで区別されていた九品詞とは別のものとした上で首尾接詞としてまとめ、これを首詞と尾詞に分別して「本ノ詞」に接する詞としている。今日でいう接頭辞と接尾辞が認識された。それによって品詞がどう変わるか、意味軽重がどうなるか、転譯して義を異にする場合はその本質的理解にまで達するように、それぞれに例をあげて説明が加えられている。これは中野柳圃の遺教を発展させてまとめたものとされている。その上で、彼はさらに新しく入ったオランダ語文法書の検討に進んでいる。

『西文規範』(1811) はパーム (Palm, K.) の『Nederduitsche Spraakkunst voor de Jeugd』(1774) の部分訳で、師の中野柳圃が用いたセウエル (Sewel, W.) の『Nederduitsche Spraakkunst』(1708) の訳が未完であるので、志をついで新しい文法書を訳出したものと指摘されている。これには『和蘭文學問答』が18章に亘って訳されている。その「撮要抜訳」の中に「辞尾ニ ing ヲ帶ビタル辞ハ皆陰辞」などとふれられている。その後の問答で、品詞などの説明に入り、第1章では voorzetsels の訳に中野柳圃の用いた「慢詞」をあて、第17章の方では同じ voorzetsels を「冠辞」と訳して、これは「変化スル事ナキ辞 是レハ^{ペルソーン}人身事物ノ動揺ヲ云ヒ顯ス諸辞ノ前ニ置ク辞」として、「場^{アウフ}処ニ関スルモノ」, 「原始^{ウルサーク}ヲ顯シスモノ」, 「除去^{ワートアールンク}不足ヲ顯ス辞」, 「時世^{アード}ヲ顯ス辞」の4種をあげ、さらに「此外ニ^{サメメンアング}接意ノ voorzetsels アリ」とのべられている。慢詞は中野柳圃が助辞からわけたものである。冠辞は馬場貞由の命名であろうか。その多くは前置詞のことである。オランダ語の文法書の発展にしたがって接頭辞と接尾辞が区別されてきていることがわかる。

中野柳圃が未完でのこしたセウエル (Sewel, W.) の文法書を抄訳したものはこの後に作成された。『和蘭文範摘要』(1814) がそれである。この「卷之下」では「voorzetzel ニハ変格ナク唯

実詞ノ前ニ置キテ物ノ起リ或ハ眩。處ヲ詳ニスルニ用ユ」とされており、その例文のあとに括弧を附して、「[voorzetzel] ノ内ニ離シテ使ヒカタキモノアリ, ant, toe, aal, be, ge, er, her, on, ont, ver, wan, 等ノ類コレナリ」として、ただし、toe は分離して用いることがあるとのべられている。

『蘭學梯航』（1816）はマーリン（Marin, P.）の文法書を参考にして作成したものとされている。ここでは、「三ノ部」で所在詞を二つにわけてのべている。「合所在詞トハ be, ge, her, ant, ver, ont, mit, on, war 等ノ類ニシテ動詞ニ前接シ用ユ」, 「離所在詞トハ aan, naar, by, door, út, met, in, naast, rondom 等ノ類ニテ実詞ト動詞ノ間タニ場ヲ得。又ハ動詞ノ後。句尾等ニ置クアリ詳ニ文章ニ隨テ其ノ接属ノ式ヲ識ルヘシ」とある。すでに首尾接詞についてこれを独立させて論じているので、これらの文法書で彼は品詞や規範全体の比較、再検討を行っているといえよう。その中で「活詞」を「動詞」と改め、「離所在詞」に対して「合所在詞」を区別し、「合所在詞」には「動詞ニ前接シ用ユ」のと、「動詞ノ後。句尾等ニ置クアリ」, 「詳ニ文章ニ隨テ其ノ接属ノ式ヲ識ルヘシ」と諸説の比較を行いつつ、より正しい文法を求めて接頭辞、接尾辞の説についても再吟味を加えている。こうして ont は動詞に接する首辞として脱去披露の意を自他二種類もつこと、ing は動詞に接して陰詞（女性）としての性質をもった実詞（名詞）に変える尾辞であることが確かめられていったといえよう。

馬場貞由には、中野柳圃が和学を修めた教えを受け継ぎ、さらに蘭、仏、英、独、露語を解し、医学から天文・地理学まで広汎に蘭学を攝取して、さらに幕命で直接外国船との対応に当り、遂に若くして病に倒れた、いわば比較洋語学的研究ともいべき視点からの検討を経た成果が示されている。『魯語』（1811・文化8年）, 『魯語文法規範』（1813・文化10年）の作成にあたって、オランダ語の特質が一層分かったことであろう。『魯語文法規範』は該当するとみられる「巻五」が未詳であるが、「巻四」の「諸動詞轉移概論」の「第三件」には「動詞ニ若干文字ヲ附接シ其意味少ク轉スル事アリ又本語トハ全ク轉シテ別意ノ語トナル者アリ」とのべているところがある。

なお、馬場貞由はオランダ語の序文などを遺している数少ない人物である。そこにも ont を接頭辞にもった語が用いられている。1つは奥平昌高編『蘭語譯撰』（1810・文化7年）の序文である。ヨーロッパ人とアジア人の性質と技術を比較して、ヨーロッパ人は静かで動じない性質によって、多くの素晴らしい学術上の発見をしたことが次のようにのべられている。「dus de Europeesen door haare Stil en bedaarend natuur kunnen veel wonderlijke konsten ontdekken,」, もう1か所は序の最後のところで、本書によって人びとは不明なところを解き明かしていくことができるであろうとのべられているところである。「het welk dit deel behelst zoo als men het hier zal ontwaaren.」この『蘭語譯撰』は、メドハースト（Medhurst, W.H.）が『An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary』（1830）を作成する際に参考にしたとされているものである。馬場貞由はこの『蘭語譯撰』の編輯内容にまで協力をしたとの指摘があるが、この辞書の中には ont に始まる語として「ontdekken 發明スル」, 「onthoofden 刎」, 「ontfanging 迎」などが収録されている。

いま1つは次項で取り上げる藤林晋山『和蘭語法解』（1812）の序文である。恩師の中野柳圃先生が文化元年に文法の真髓を発見して以来、立ち籠めていた暗雲はすっかり消え去ったことを記したところで「maar zedert de ontdekking van de opregt smaak van de spraakkonst,」と用い、

中野柳圃の弟子3人の内、江戸にいるのは自分だけなので、として「de tweede is reets dood, en de derde word daarna aan't hut Jedo ontboden;」と記している。自分は幕府に召されて江戸へ移ることになった、とのべたくだりである。続けて、藤林晋山も中野柳圃の学を修めた学徒であり目的を同じくしている。著書をみればあいまいであったところが解消されるとのべているところで「gelijk men hier nader zal ontwaaren;」と用いられている。

この他、馬場貞由が作成した『語厄里亞語忽兒朗土語集成』（時期未詳）には「願書ハ此方共ニハ請取ラレス uw verzoek brief mogen wij niet ontvangen. your request we can not receive」とあり、異国船応接に必要な語として、ontvangenがこの他にも4か所にてでくる。これは『蘭語首尾接詞考』のontの説明にも取り上げられている語である。

以上によって、青木昆陽の『和蘭文字略考』の「卷之二」（1746）にonthoudenが登場して以来でも、馬場貞由『蘭學梯航』（1816）までの70年に及ぶ、厳しい時代的な制約の下にありながら、長崎の通詞たちと江戸の蘭学者によって行われたオランダ語和解についての努力の蓄積が、接頭辞ontを伴う語の検討にも一貫して反映していることがわかった。それは九品詞とは別のものとして、特に前置詞と区別された語の構造における首辞と尾辞の理解の問題として焦点化されてきた。

この時期に、長崎商館長 Doeff, H. によって「頗る俊秀なる青年」と評価されて、オランダ語だけでなく、フランス語と英語を学び、1808年に江戸天文台に出府してからはロシアやイギリスとの応接のかたわら、15年間に各種の文法書を究めて、馬場塾、三新堂などで教育にもあたって多くの弟子を育てた馬場貞由の貢献には極めて大きいものがある。その評価は当時においても、これまた高く、杉田玄白は『蘭學事始』（1815・文化12年）で「わが子弟孫子・その教へを受くることなれば、各々その真法を得て、正譯も成就すべし」と評価し、大槻玄澤は『蘭譯梯航』（1816）で「都下ノ旧法廢シテ新法正式ニ一變セルナリ」と評価したほどであった。馬場貞由が江戸に在住した15年間に天文台や塾で彼に受益したものは多く、片桐一男によると、高橋景保、大槻玄澤、杉田恭郷、杉田立郷、宇田川玄真、宇田川裕庵、奥平昌高、神谷弘孝、大江春塘、藤井方亭、藤林晋山など、これ以後に活躍することになった俊英の多くの育成に貢献をしているということである^{15)-⑦}。

7) 藤林晋山の場合^{16,17)}

大槻玄澤の門下生であった稲村三伯は『波留麻和解』（1796・寛政8年）を作成した。京都で医学を学んだ藤林晋山（1781～1836）は、これを購入、独学したとされる。稲村三伯が海上隨鷗と変名して京都に移住してからはその門下生として蘭学を学んだ。その間、『波留麻和解』を精選し、新しい訳をつけるなどして『譯鍵』（1810・文化7年）を作成、刊行した。その際、文法を略説して「凡例附録」としたが、同じ内容が『蘭學逕』（1810・文化7年）として、稲村三伯の跋文を得て刊行されている。この書の中で彼は「辞性ニ。九等アリ」として九品詞をあげているが、接頭辞、接尾辞にあたるものはその中に入れることをしないで、「辞性」の説明に入る前に「冠履辞」の章を設けて解説をしている。すなわち、「冠トハ上ニ附テ本語ヲ動カス助詞」、「履トハ下ニ接シテ本語ヲ動カス助詞」（16）であるとしている。馬場貞由は文法などを訳す用語は、師の中野柳圃の和学的検討を尊重しつつも、その表現は「通俗平和ヲ専ラ」とし、「通読

ニ便」であるように心掛けるべきであり、「漢字ナトヲ以テリッパニ命名セントシテ骨ヲ折ル事ハ無益ノ至リ」（『西文規範』等参照）で、それで意味が通じるわけではないと考えていた。所在詞から分離して馬場貞由が命名した首辞や尾辞にもそうした態度がうかがえる。馬場の教えにも接した藤林晋山はしかし、いわゆる上方言葉を使う京都にあってか、藤原基通の後裔という家柄で、僧籍にあり、後には有栖川家の医員にもなったといわれる立場に身を置く者としてか、馬場の「通俗平和」を継承しつつも、生々しい表現は、これを避け、さらに厳密な吟味を加えようとしたのであろうか。接頭辞、接尾辞についても、馬場貞由が説明のために用いていた用語の方を生かして、より正確な認識の下に名称をつけようとしたかのようなようである。語の首部そのものではなく、「本ノ詞」の首部へ冠する辞なのであり、したがってそれは必要があれば他の冠に置き換える場合もありうるとみたのであろう。尾辞もしかりである。馬場貞由は、voorzetselsに「冠辞」の訳をつけたことがある。しかし、彼は常に「訂正ヲ加テ可ナリ」というのであろうから、その了解も得たのであろう。藤林晋山の後の書『和蘭語法解』（1812）に馬場貞由はオランダ語の序文を寄せており、馬場の死後、馬場穀里の名で刊行された書名には『蘭語冠履辭考』（1855・安政2年）が用いられている。

さて、『蘭學逡』で藤林晋山は34種類の冠辞をあげている。ここではまだ接頭語と前置詞が混在しているが、アルファベット順に配列されている。その中で「ontハ。鮮。離。脱。去。穿。逃。放。甚。ノ意ナリ」（18）と記され、多くの意味が簡潔に表現されている。また、例えばafの所では「afハ。アーンノ反ニシテ。離。背。開。廣。間。解。除。遂。脱。放。等ニ用ユ。又ラントト同義ナレトモ。大抵ラントハ作為。アフハ自然ト別ツ。」という具合に他の冠辞との区別が示されている。ただし、例をあげての説明はない。どちらかという、馬場が例を用いて考え方を示していたのに対して、藤林は結論を示すという手法を採用している。

履辞には37種類があげられている。この中でingに関しては、「ingハ。名目語ナレトモ。ヘイド（heid）トハ少異ニシテ。活用ニ係ル。假令ハ。vogtigheidハ。液。vogtingハ。潤。又aal-misheidハ。施物。aalmoessingハ。施シ等ニテ推ヘシ」（22）として両者が比較例示されている。heidの方は、「heidハ。名目語ニシテ。不動且一定スルノ死辞ナル故物字ノ意アリ。」とされている。

『蘭學逡』の2年後に藤林晋山はオランダ語の語法を中心に『醫門須知 和蘭語法解』（1812・文化9年）を刊行した。これは、原著者が明らかでないが、オランダ語文法書の翻訳紹介であり、ここには前項でその一部を取り上げた馬場貞由のオランダ語の序文が収められている。但し、ここでは前著『蘭學逡』で用いた品詞の用語をすべて変更している。前者を『蘭學逡』、後者を『和蘭語法解』として、括弧内に現行の名称を示すと、辞性一言辞（品詞）であり、九品詞は、素性語－性言語（冠詞）、名目語－名言（名詞）、直斥ノ辞－代言（代名詞）、活用語－活言（動詞）、分出語－分言（分詞）、附添ルノ辞－添言（副詞）、前置ノ語－接言（前置詞）、連接ノ語－上言（接続詞）、不意ニ呼出スノ語－感言（感嘆詞）となっている。これまで取り上げた蘭学者のすべてとも異り、しかも師から学んだ用語と新たな訳語とを区別している。著書と翻訳書の用語を区別したのか、文法用語の吟味発展とみるべきか。学習者にとっては説明がほしいところであろう。

この「巻之下」の「㊦」「上言篇」に、『「ホールセツチェレン」ト云。即チ上置言ノ義ニシテ名言代言及ヒ活言ノ上ニ置ク所以ノ言ナリ。略シテ今茲ニ上言ト譯ス。此ニ二等アリ。一ハ蓋言。

一ハ冠言ナリ」(下-17~18)とある。そして「蓋言」は「獨立上言トモ稱ス」とされている。「離上言ノ義ニシテ。名言及ビ代言ノ上に置ク事。恰モ蓋ノ如シ。——是所在由來時刻員數ニ係リ且ツ生与役奪ノ四格ニ関ル所ノ言」(下-18)との説明がなされている。そして「冠言」は「『ランシケイドバル。ホールセツチェレン』ト云。即チ合上言ノ義ナリ。名言及ビ活言ノ上ニ接スル事宛モ首ニ冠スルガ如シ。——是活言及ビ名言ニ冠シテ其義ヲ轉ゼシムル所以ノ言ナリ」(25)として31種の冠言をあげている。aan, achter, af, al, be, binnen, boren, búiten, bij, door, ge, her, in, na, neder, neer, om, on, onder, ont, op, oper, over, tegen, toe, úit, ver, voor, voort, vrij, wan がそれである。その中で「ont ハ。解脫去奪離逃放ニ當ル。即チ^{解フ}ontbinden, ^{葉ヲ去ル}ontbladen, ^{開ス}ontdekken ト云カ如シ」(下-27)と。『蘭學逕』に比べて順序が入れ変わっているのと、「穿」が「奪」に変わっている以外は同じで、『和蘭語法解』の方は例語が示されて訳が付いている。ただし、『蘭學逕』にあった af との比較検討はない。「af ハ aan ノ反ニシテ開離解除脱放盡ニ當ル。即チ^解afbinden, ^開afhaalen, ^{携フ}afbetaalen ト云ガ如シ」(下-26)となつて、ここでは「背。廣。間。遂。」がなくなり、「盡」が加わり、例語があげられている。『蘭學逕』では九品詞以外のものとしてのべて、接頭辞と前置詞が混在していたが、ここでは九品詞の上言の中で、蓋言=離上言と冠言=合上言にわけてのべられている。

その上で「履言」では、「『ナーセツチェル』或ハ『ライトガンク』ト云。即チ履言ノ義ニシテ直ニ名言及ビ活言ノ尾ニ接シテ其義ヲ轉ズル所以ノ言ナリ。是元來上言ノ属ニ非ズト雖モ。冠言ニ對スベキ言ナルヲ以テ今此ニ附載ス。」(下-19)と記して、さらに「冠履ノ両言ハ西書中唯名目アルヲ見レドモ。未ダ聚テ之ヲ釋セル者ヲ見ズ。故ニ今余ガ臆見ヲ以テ之ヲ釋ス。謬解アラバ。後ノ君子之ヲ正セ」(下-29)と断りが入れられている。ここには、aar, eer, er, ier, leng, agtig, baar, d, t, de, dom, en, gierig, hande, lei, heid, heden, ig, ing, ken, kens, je, sje, tje, lig, lis, lijk, linges, loos, maal, reis, nis, nisse, nij, gij, rije, s, sch, schap, schappen, st, ste, ster, es, esse, f, in, inne, te, zaam, zel, zins, sints などがあげられている。ing に関しては「ing ハ事物ニ當ル。即チ^{以難}ontsteeking, ^{解別}ontleeding, ^{蒸発気}úitwaaseming ト云ガ如シ」(下-30)となつて、『蘭學逕』の場合とは別の説明になり、heid との比較もなくなり、例語も変わっている。heid の方は「heid, heden ハ事物症等ニ當ル。即チ^解wysheid, ^{諸液}voiptigheden, ^{中風}lammigheid ト云カ如シ」(下-30)とこれもすっかり変わっている。「履言」は「言ノ属ニ非ズ」としながらも、「冠言ニ對スベキ言ナルヲ以テ」取り上げるとされている。ここにも馬場貞由の場合と同じく、当時のオランダにおけるオランダ語文法の研究が反映できているのを見ることが出来る。その上で、中野柳圃、馬場貞由に示された先達の努力を継承し発展させようとしているといえよう。

8) 大槻玄幹の場合^{18,19)}

大槻玄幹(1785~1837)は大槻玄澤の長子で、中野柳圃に蘭学を学び、馬場貞由、吉雄権之助にも推めてその内に入らせたとされる人である。彼は『蘭學凡』(1816・文化13年)を「柳圃先生の遺教」としてまとめている。これは馬場貞由没後1824年に蘭学局に提出されたものであるとされる。ここでも大槻玄幹はオランダ語を学ぶには、配字と詞性(品詞論)と綴詞(構文論)の三組を修めることが必要であるとのべている。彼は詞品(品詞)を転移詞品門と不転詞品門に分けて、前者に五つ、後者に四つの、合計九品詞の命名をしている(括弧内は現在の名称——田

中註)。すなわち、転移詞品門は、弁声詞（冠詞）、物名詞（名詞）、指名詞（代名詞）、作用詞（動詞）、分類詞（分詞）であり、不転詞品門は加添詞（副詞）、接続詞（接続詞）、処前詞（前置詞）、挿間詞（間投詞）である。処前詞については「名詞ノ前ニ處シテ助語ノ用ヲ作シ又諸詞ニ接シテ本義ヲ轉スル詞」として、「連用前詞」と「分用前詞」にわけた上で、これは『訂正和蘭接続詞考』でのべるとしている。

『訂正和蘭接続詞考』（1825・文政8年）は馬場貞由の稿本にもとづくものとされるもので、先の「處前詞」を分用前詞29種と連用前詞10種あげて、後者は「本義ヲ轉スル」とみている。この連用前詞は、aal, ant, be, er, ge, her, on, ont, ver, wan の中で、ont については、「ont 奪。脱。去。放等ノ義」と記されている。その説明の中で青木昆陽『和蘭話譯』（1743）にでてきた houden を名詞化したものが次のように論じられている。「名詞ハ houdentheid 保, ont, ヲ接シテ彼ヨリ套ヒ此ニ保ツ意トナレハ記憶トナル, 又有リタル者ヲ失ヒシ義ヲ以テ紛失ノ義トナル」とし、あるいは中野柳圃が『（柳圃中野先生文法）』で、馬場貞由が『蘭語首尾接詞考』で例にあげた ontkleeden についてもこれをさらに他の語との間で比較検討している。すなわち、「用詞ハ kleeden, 衣, 着, ont ヲ接シテ衣著ヲ脱トナル vangen, 取, ont ヲ接シテ放取意トナレバ受容トナル haalen, 取寄, ont ヲ接シテ放取寄意トナレバ陳設トナル dekken, 覆, 塞, ont, ヲ接シテ塞ヲ放チ去ル意トナレバ開闢。發明。等ノ義トナル, leeden, 支節, ont ヲ接シテ支節ヲ脱スル意トナレバ解支トナル hoop, 望, ont, ヲ接シテ望ヲ失フ意トナレバ失意ノ義トナル等」とのべられている。本質的な理解への努力が拡がり、馬場貞由が『蘭語首尾接詞考』で用いた例語に対して大槻玄幹としての説明が行われているのを見ることが出来る。藤林晋山が『和蘭語法解』で取り上げていた ontdekken についても考察が重ねられている。

處後詞に関しても28種が取り上げられ、ing については、「能用詞ニ續シテ定名詞ニ轉スル者, twyffel 疑フト譯ス能用, ing ヲ續シテ疑惑トナレバ定名に轉シ又 snyding ハ切断トナル等」とのべられている。ここでも馬場貞由の『蘭語首尾接詞考』の中で取り上げられていた twyffeling に新しい訳が付けられるなど、訳語の検討が進んでいることがうかがえる。

これらは大槻玄澤がはじめて接頭辞 ont を取り上げた頃の水準よりいずれも高い。ここには江戸における蘭学が長崎の通詞出身者の協力をえて、19世紀に入ってからオランダの文法研究の成果を吸収しつつ、その成果の共有を確実に拡げていっているのを見ることが出来る。

2 ontwikking に対する訳語の検討

1820年代までの日本におけるオランダ語の接頭辞 ont と接尾辞 ing などに対する認識の発展を調べてきたが、これまでの調査では未だ、ontwikking の語は登場していなかった。これは、当時渡来したオランダ語の辞書の影響が大きいとみられる^{1)~④}。けれども、これまで検討されてきた ont や ing に対する認識をもとにする時、wikkelen の意味が分かっていたならば、ontwikking が登場してきても、その訳語は一先ず与えられるところまでの準備ができていたのを知ることができた。では、蘭和辞書では wikkelen は和訳されていたのであろうか。また ontwikkelen, あるいは ontwikking に訳語が登場してきたのは、いつ、誰によってなのであろうか。

これまでの調査では以下の項目で取り上げるアルファベット順の蘭和辞書以外の各種の節用集

形式の蘭和辞書で特色をもっている森島中良『蛮語箋』(1798・寛政10年)、奥平昌高『蘭語譯撰』(1810・文化7年)、高橋景保『亜欧語鼎』(1823・文政6年)、辻蘭室『蘭語八箋』(時期未詳)などには以下に取り上げる *wikkelen* や *ontwikkelen* などの語の収録を見出すことはできなかった²⁰⁾①。

1) 稲村三伯『波留麻和解』(1796・寛政8年)²⁰⁾②、²¹⁾

この蘭和辞書の底本は、ハルマ(Halma, F.)の『*Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen*』(1729)で、これは同辞書の第2版である²²⁾。この原書の見出し語には *ontwikkelen* は収録されていない。*wikkelen* は次のようになっている。

「*Wikkelen Zit Inwikkelen. * Zig in eene zaak wikkelen, zig ergerns in steeken of mede bemoeyen. se mêler, s'ngager, se fourrer dans une affaire.*」(963)

稲村三伯(1759~1811)他の『波留麻和解』(1796)の作成には元通詞の石井恒右衛門を中心として宇田川玄隨、岡田甫説らがあたり、後半には安岡玄真(後の宇田川玄真)が協力しているとされる。斎藤信によると『波留麻和解』の東大本には訳の「未詳」が824語あったと指摘されている²¹⁾。この *wikkelen* の語も収録はされているが訳は空白のままである。しかし、その後訂正を加えて幕府に提出したとみられる静岡県立中央図書館の江戸幕府旧蔵本には「*wikkelen* 卷コム」の訳があたえられている。さらに大槻家旧蔵とされる『波留麻和解』の一つでは「卷コム、包コム、クリコム、夾ミコム、巻ク」となっている。これは大槻家で書き入れを行って充実をはかったものであろう。『波留麻和解』の中で *wikkelen* につけられた訳では最も豊富なものと思われる。そして、これまでの調査では、この大槻家旧蔵の辞書だけに「*ontwinden*」の前に「*ontwikkelen*」が墨書きで追加挿入されて、これには「包ナド解ク」の訳がつけられている。これが、いつ、誰によって追加対訳されたものか、筆績などについての研究が待たれる。

2) 藤林晋山『譯鍵』(1810・文化7年)^{16,17,23)}

『波留麻和解』を購入して独学をしたとされる藤林晋山(1781~1836)は、稲村三伯の諒解の下でこれを精選すると共に、マーリン(Marin, P.)やハンノット(Hannot, S.)その他の蘭洋辞書にあたって『譯鍵』を作成した。その際、彼は『波留麻和解』の「未詳」の語彙の内、131語に新しい訳をつけたとされる²¹⁾。ここでいうハンノット(Hannot, S. & D. van Hoogstraten)の原典は未詳であるが、日本見在の『*Nieuw Woordboek der Nederlantsche en Latynsche Tale*』(1719)には *ontwikkelen* は収録されていない。*wikkelen* は次のようになっている²⁴⁾。

「*WIKKELEN, rollen. Circumplico, as, avi, atum, are. acc. Cic. Zie Rollen, enz. Zig in de gemoederen wikkelen. Influere in animos. Cic. Off. 2.9. Zie Inwikkelen.*」(972)

マーリン(Marin, P.)の原典も未詳である。日本見在で西善三郎『マーリン辞書』(1773・安永2年)の底本とされているものと同じであるとすれば、Marin, P.の『*Groot Nederduitsch en Fransch Woordenboek*』(1730)であるが、1793年版以外のものには *ontwikkelen* は収録されていない。1730年版では *wikkelen* は次のようになっている²⁵⁾。

「*Wikkelen. v.a. Inwikkelen, mengen, betrekken ergens in. Mêler, intriguer, embarquer dans quelque affaire. Iemand in een moeielyke zaak wikkelen. Intriguer quelqu'un dans une*

méchante affaire.」(552)

したがって、藤林晋山の『譯鍵』にも *ontwikkelen* は収録されていない。*wikkelen* の訳に関しては、手稿本では「巻コム」をあてており、刊行本(1810)では「巻入」(280)に改められている。それ以上の説明はない。この「巻コム」は『波留麻和解』では最初に記入がなかったものが、後の江戸幕府旧蔵本などにみられるようになったものである。この間の事情は明らかではない。

藤林晋山『譯鍵』(1810)はその後、廣田憲寛によって『増補改正譯鍵』(1857・安政4年)として改訂されたが、*wikkelen* の訳は「巻入」(377)となっており、『譯鍵』の刊行本と同じである。

3) Doeff, H. 他『(道譯法児馬)』(1833・天保4年)^{26,27)}

この底本は1)の稲村三伯他『波留麻和解』(1796)と同じ、ハルマ(Halma, F.)の『Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen』(1729)である。『(道譯法児馬)』(1833)は長崎商館長ゾーフ(Doeff, H. 1777~1835)の指導の下に、長崎通詞の中山時十郎、吉雄権之助、西儀十郎、石橋助十郎、名村八太郎、名村八十郎、猪股伝次右衛門、西甚三郎、植村作十郎、志筑長三郎、三島松太郎の11名が協力して、例文訳もとり入れた本格的な蘭和辞書である。『波留麻和解』(1796)ができてから3分の1世紀を経て完成したことになる。しかし、何故か、ここでも『波留麻和解』と同様、*wikkelen* の語は収録されているのに訳のところは空白である²⁶⁾。ただ、*wikkelen* の見出しの下に*印の付いたオランダ語の例文(本稿196ページ参照)には訳がつけられている。この辞書で江戸幕府に献上したとされるものには「或る事に自分と這入こむ」となっている。香川大学付属図書館館本文庫にある『長崎ハルマ初稿本』とされているものでは、この例文は「(七五)アル事ニ自分ト這入リコム」「アル事ニカ、リ合フト云フ事」(963)となって、訳だけでなく説明が加えられている。そして、この説明は他の写本にも引き継がれている。

『(道譯法児馬)』の場合、これまでの調査では、*ontwikkelen* などが書き入れられて訳がつけられているものを見出すことはできなかった。ただし、松田清によって高知県立追手前高等学校の書庫で発見されたDoeff, H.の手稿本とされるものについては未見である。

『(道譯法児馬)』をもとに、マーリン(Marin, P.)やウェイランド(Weiland, P.)、マルチン(Martin, H.)の蘭語辞書を参考にして作成し、刊行を願い出たが幕府の許可がえられなかったものとして佐久間象山の『増訂荷蘭語彙』(時期未詳)がある²⁸⁾。これまでに「あ」の部しか所在の確認ができていないが、その範囲には *aanrollen*, *aanwinden* は収録されているが、*vouwen* や *wikkelen* を語幹とした語は見出されなかった。

なお、桂川甫周編『和蘭字彙』(1855~1858・安政2~5年)は幕府の許可を得て刊行された初の本格的蘭和辞書であるが、その内容はDoeff, H.らの『(道譯法児馬)』をもとにしており、見出し語に *ontwikkelen* などは収録されていない^{29,30)}。*wikkelen* にも訳はつけられておらず、例文訳とその説明も『(道譯法児馬)』と同じである。

4) 宇田川玄真『檢箎韻府』(時期未詳)^{31,32)}

『檢箎韻府』は宇田川玄真(1769~1834)が馬場貞由の教えを受けて疑を正しつつ作成していた蘭和辞書の稿本で、みだりに他人に貸し写しをさせてはならないとされていたものである。この中で初めて、書き入れなどではなく最初から *ontwikkelen* と *ontwikkeling* の語が収録されて訳

が与えられているのを見出すことができた³¹⁾。底本は未詳であるが、wikkelen に対するオランダ語とフランス語の説明と例文は先の Halma, F. の系統と同じである。ここでは、wikkelen に訳があたえられ、例文の各語に訳がそえられているので先ずそれを記して、『(道譯法児馬)』と比較をしておきたい。

【檢籠韻府】の wikkelen は次のようになっている。

「wikkelen, zie inwikkelen. 圍ム, 夾ム, 包ム, *Zig in ^{自ラ} ^{一丁} ^{一ノ} ^事 ^{夾マレル, カカリアフ} ^{自ラ} ^{何ノ處ニ} ^{ツキ込マレル} ^又 ^{共ニ} ^{勞スル} eenē zaak wikkelen, zig ergens in steeken of mede bemoeijen.」

この筆記体を Halma, F. の『Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen』第2版(1729)の原文とくらべると、wikkelen の kk が lk となっている。この筆記体の様式は k が重なっている場合などに宇田川玄真とその学統がよく用いたものである。zit inwikkelen の zit を zie とし, bemoeijen の y を ij としているなど、桂川甫周の『和蘭字彙』(1855~1858)と同じく原書の初版を用いているとみられる。『和蘭字彙』と異なるのは, zich が zig となっているところである。これは原書の第2版以降の用法であるが, 第2版と異なるのは第2版では ergens のみで zig を省略していることである。見出し語の訳である「圍ム, 夾ム, 包ム」は, 稲村三伯『波留麻和解』の大槻家旧蔵本の書き入れにあった「卷コム, 包コム, クリコム, 夾ミコム, 卷ク」とくらべると, 「~コム」という強めの動詞を用いていないことが注目される。訳は Doeff, H. らの『(道譯法児馬)』(1833)の「アル事ニ自分ト這入リコム, アル事ニカ、リ合フト云フ事」が「自ラーノ事ニ夾マレル, カ、リアフ, 自ラ何ノ處ニツキ込マレル 又共ニ勞スル」となっており, 宇田川玄真の訳の方が初期の, しかし丁寧に訳語の吟味をしていることがうかがえる。【檢籠韻府】の京都市立西京商業高等学校図書館平野文庫本ではこの書の作成が1813~1822・文化10~文政5年と推定されている³²⁾①。『波留麻和解』(1796)作成の後半に協力した宇田川玄真がより完成したものの必要から Doeff, H. らのグループとは別に作成作業を進めていたものなのであろうか。それは宇田川家が蘭医学を含む翻譯作業と教育に不可欠なものとして取り組んだのではないかとの仮説の吟味も含めて検討が必要と考える。

いま一つ, これが Halma, F. の系統と異なるのは, 【檢籠韻府】には ontwikkelen と ontwikeling の双方が最初から収録されて次のように和訳されていることである。

「ontwikkelen ^{マキホグス} 卷解 又通誦スル

ontwikeling 卷タルモノガホグレタル」

wikkelen の和訳として『波留麻和解』(1796)が後に「卷コム」を, 『譯鍵』(1810)が「卷入」をあてていたが, それに対して接頭辞 ont を接することによってここでは「卷解」となっている。「ほぐす」は「解く, ほどく, ほつす」の古い用法である。いずれも蘭訳としてはやや古い ontwinding を対応させたのではなかろうか¹⁾④。大槻家旧蔵本の書き入れが「ontwikkelen 包ナド解ク」となって ontvouwing の系統と対応しているのとは微妙な違いがある。さらに本質的理解として, ここでは「通誦スル」があてられていることも注目される。「声を立ててよむ, そらんずる, となえる」の意味である。以上の訳語については, これまでに実見した六個所に見在する【檢籠韻府】では, いずれも基本的に同じで, 振り仮名, 送り仮名の違いにとどまり, 書き入れも見られなかった³¹⁾。

なお, 【檢籠韻府】には接頭辞 ont で始まる語彙が重複も含めて見出し語として約50語収録さ

れている。その中には17, 18世紀の洋辞書で当時のフランス語の *développer* と対応していたオランダ語である *ontwinden*, *ontvouwen* などは含まれていない^{1)-④}。他方、これまでの Halma, F. 系の蘭佛辞書には収録されていなかった *ontbieden* や *ontdekkingen* など新しい語彙が13語収録されている。その内、後の桂川甫周『和蘭字彙』(1855~1858)に収録されているものは2語だけである。どちらかという Halma, F. 以外の系統のものを必要上、当時としては意識的に収録して、適切な新しい訳を試みているとの印象を受ける。その中に *ontwikkelen* と *ontwikkeling* が何故収録されたのかに関しては、当時におけるオランダ南部の言語環境の変化もふくめて今後の研究課題となる^{1)-④}。

【檢籠韻府】に続く宇田川家旧蔵本であった『續檢籠韻府』(時期未詳)でも同様に、ここにはすでに *ontwikkelen* や *ontwikkeling* も収録されていない。接頭辞 *ont* に始まる語の収録数は約50語で、内、稲村三伯の『波留麻和解』(1796)に収録されていないものは10語、『檢籠韻府』にもない語が8語ある。他の辞書にでていないオランダ語でも訳語に工夫がみられる。収録されている語の内、後の桂川甫周『和蘭字彙』(1855~1858)に収録されているものは2語であった。

宇田川玄真は稲村三伯『波留麻和解』に協力をしてから後もこのような性格をもった『檢籠韻府』を作成し、宇田川家では引き続き『續檢籠韻府』の作成に当って研鑽を積んでいたのである。この過程で、宇田川玄真によって、『波留麻和解』への協力後の『檢籠韻府』作成の段階で *ontwikkelen* と *ontwikkeling* に訳が付けられたが、それは Halma, F. の系統ではなく、Marin, P. の蘭佛辞書では *ontwikkelen* が1793年版から登場するので、恐らくそれらも参考にしたのではないと思われる^{1)-④}。『檢籠韻府』には、青木昆陽『和蘭文字略考』(1746)以来登場して、第1部でのべたように適切な訳をめぐって蘭学者を少なからず悩ませてきた語の1つである *onthouden* が収録されて、実に16行に亘ってオランダ語とそれに対する訳がつけられている。基本は Halma, F. の蘭佛辞書からの引用であるが、その中の5箇所において、Marin, P. の蘭佛辞書の1768年版および1793年版と同じ文章が選択、付加されている³³⁾。これなどは『檢籠韻府』の Marin, P. との関連の強さを示しているものである。しかしこの場合は、Marin, P. の蘭佛辞書の1793年版でも *ontwikkelen* は見出し語が準備されているだけであり、*ontwikkeling* の語はまだ収録されていなかったのであって、何故 *ontwikkeling* が『檢籠韻府』に収録されたのかについての説明は残されることになる^{1)-④}。

ところでこれより以前、宇田川玄真には『遠西醫範』(時期未詳)や『和蘭内景醫範提綱』(1805・文化2年)があり、後者にも「發ス」の語は多用され、「機力ヲ起發ス」とか、「揮發・衝動・透發・開達シ」、あるいは「振發開達」などの語彙が用いられているが、これまでのところオランダ語との対応は未詳である³⁴⁾。また、彼にはスエーデンのローゼスティン(Rosenstein, N. R. von)の『Underrättelser om Barnsjukdoman och deras Bote-Medel』(1764)をオランダのサンデホルト(Sandifort, E.)が蘭訳(蘭訳書名は未詳。1779-第2版)したものを『紅毛秘書 小兒諸病鑿法全書』(時期未詳)とした未刊の訳稿がある³⁴⁾。ここには「小兒亦欣然無病ニ長育スル者」、「服飾ヲ除テ肢体惣テ拘束ノ碍リナク自由ニ運動セシムヘシ此ニ由テ其体正真ニ生長ス」、「彼兒ノ成長スル迄ハ唯自然ニ任テ療具ヲ用ユヘカラス」、「年長セル小兒」など、長育、成長、生長、年長の当時の日本でよく用いられていた4種類の語があてられているが、これもこれまでのところ対応するオランダ語は未詳である。ただ訳語は、当時の日本語の用法を基本にしているとみら

れ、長育は育つこと、生長は身体的生長、成長は成人になること、年長は小児の中で年齢の高いもの、といった区別した用法をみることができる。

19世紀に入ると蘭学に対する厳しい規制の下で類似用語の厳密な検討、適確な訳出に心血が注がれた。医学、薬学など自然科学分野での導入がそれをうながしたことはいうまでもない。大概家旧蔵の『波留麻和解』への書き入れにもその一端をうかがうことができた。

宇田川家でも共通した努力が重ねられた。例えば三代の宇田川榕庵『観自在菩薩樓隨筆』（時期未詳）になると、「作發起等 オコル オコス」として、ontstaan, voortkomen, oprüiten, veroozakenなどの語意の考察を行い、次のようにのべているところがある。すなわち、voortkomenには「草モ実モ共ニ地ヨリ発ル」の説明をつけ、さらに「一切ノ罪障トナルノ嗜慾ハ皆心ヨリ発ルナリ」であるとして語の意味を本質的理解に至る二重性において認識した上で、これには「発ノ字」をあてるとしている。一方、sprüitenは「ハジメ オコル」とか、「生レタリ」であり、veroozakenも「ハジメヲオコシ小口ノタツヲ云」であるから、どちらも「起ノ字ヲ以テ対称スベシ」とするなど、類似語の共通性と相異点を明らかにしようとしている³⁵⁾。これらが訳語だけでなく、当時の規制の下で発音を漢字で表現する努力などと共に行われ、宇田川玄真『字韻集』、宇田川榕庵『華音集要』（いずれも時期未詳）などが遺されている。大概家の『和蘭語韻』（時期未詳）から『西音発微』（1826・文政9年）『西韻府』（1833・天保4年）に至る努力にもそれをみることができる³⁶⁾。これらによると ont は大概玄澤が「翁多」を、宇田川玄隨が「翁篤」を、宇田川玄真が「臘多」を、次項に取り上げる堀内寛は「温多」をあてているなどのこともわかる。

宇田川家は、これまでものべたように、蘭学の初代として宇田川玄隨がゴルテル (Gorter, J.) の内科書を『西説内科撰要』（1793）として刊行するなど医学を中心とした分野で貢献をした。2代の宇田川玄真は『遠西醫範』をもとに『和蘭内景醫範提綱』（1805）や『和蘭藥鏡』（1819）、『増補重訂内科撰要』（1825）、『新訂増補和蘭藥鏡』（1828）を刊行するなど、医学、薬学を中心とした分野で貢献をしている。3代の宇田川榕庵（1798～1848）は宇田川玄真と共に医学、薬学、ショメール (Chomel, N.) の百科全書の翻訳などにあたったが、さらに『善多尼訶経』（1822）、『植学啓原』（1834）などの植物学、『遠西醫方名物考補遺』（1834）、『舍密開宗』（1837～1847）などの化学から自然科学、歴史、地理、軍事技術、文化にまで及ぶ紹介をしている。医学を基本とした科学技術の導入は、それがそれ以前の中国渡来のものより秀れているかどうかを理解するためにも、先ず何よりも正確な理解に基く訳をすることが求められた。これが『檢籠韻府』や『續檢籠韻府』などの作成に継承されていくことになったとみられる。19世紀前半の4分の1世紀には、蘭語学に通じた蘭学者および蘭学教育者が次代を担うにふさわしく揃い始めた時期といえよう。宇田川玄真に学んだ者としては坪井信道、箕作阮甫がおり、さらに多くの蘭学者が輩出しようとしていた。

5) 堀内素堂重訳『幼幼精義』（1843・天保14年開雕）^{37, 38)}

堀内素堂（1801～1854）は、1820・文政3年に出羽米沢から江戸に出て、漢学を、昌平坂学門所の儒者となり後には洋学所つづいて蕃書調所の頭取にもなった古賀謹一郎に学び、蘭医学を馬場貞由の弟子である杉田立郷、青地林宗に学んだとされる。米沢藩主上杉鷹山に認められ、藩の

医学校である好生堂を蘭医学の学校にするように改革を求められ、尽力した。宇田川玄真の門下生で、江戸に安懐堂や日習堂を開いて多くの蘭学生を養成した坪井信道とは特に親交が厚かったとされる³⁸⁾②。堀内寛によって、わが国最初の西洋小児科学翻訳書の刊行となった書が、『幼幼精義』である。

これは当時イェナ大学の教授で、後にベルリン大学教授となったフーヘランド (Hufeland, C.W. - 1762 ~ 1836) の『Bemerkungen über die natürlichen und geimpften Blattern, verschiedene Kinderkrankheiten, und sowohl medizinische als diätetische Behandlung der Kinder』(1798) を、オランダのサクセ (Saxe, J.A.) が『Waarneemingen over de natuurlijke en ingeënte Kinder-Pokjes, over verscheidene ziekten der Kinderen, en zowel over de geneeskundige behandeling, als over den Leefregel der Kinderen』(1802) として訳した書を、さらに堀内寛が1839・天保10年にオランダ語から改編重訳して初篇三巻、第二篇四巻までを刊行することができたものである。初篇の序文を坪井信道、跋文を杉田立郷が、第二篇の序文を箕作阮甫、跋文を伊東玄朴が寄せている。また第二篇には附録として堀内寛輯纂の「名稱義略」がある。

初篇は「原病總論」, 「吐剂論」, 「下剂論」などからなっている。「原病總論」はドイツ語原典およびオランダ語訳本の第3部第1章「Algemeene denkbeelden over de ziekten der kinderen, en de belangrijkste kinder-middelen」を改編訳出したものである。オランダ語訳の第3部にあたるところを最初にもってきたのは、後にのべるように出版許可がえられにくい状況になったことにもよるが、内容的にみて、ここに「啞科 (小児科——田中註) 原病之学調治之法」が基本とすべき子どもの発達の特徴を把握する必要が記されていたことによるものと思われる。当時はまだ本格的な子どもの発達研究は行われていなかった。しかし、上杉鷹山のもとにあって、堀内寛にとってその必要性は理解されたことと思われるし、Hufeland, C.W. の書でも新しい研究の方向としてそれが指摘され、すでに Hopfengärtner, S. (1792) などによって、人間の発達と関係がある疾病などについて素朴ながら着目されていることが紹介されていた⁴¹⁾。それらと自らの見解をもとに、Hufeland, C.W. は論を展開している。その論述の過程で Entwicklung が用いられており、Saxe, J.A. によってこれが ontwikkeling と訳されるなどして、その書が当時のわが国にもたらされたものである。堀内寛はそれを重訳した。訳出にさいしては、オランダ語の意味の理解、関連概念の区別、日本語訳などに以下にみられるような工夫がなされており、ontwikkeling の導入にあたって貴重な努力が払われているのを見ることができる。

【幼幼精義】では、「はじめに」の部分に1か所、「第一」の部分に1か所、「第四」の部分に8か所、「第五」の部分に5か所の計15か所に ontwikkeling などの語があり、それらに対する訳語があたえられている。以下にその部分を①から⑮まで、Hufeland, C.W. によるドイツ語の原文、Saxe, J.A. によるオランダ語の訳文、堀内寛による漢訳文の順に文脈の説明を加えて紹介を行う (引用文最後の括弧内の数字は、それぞれの書の該当個所の収録ページ数である)^{39), 40)}。

① まず「はじめに」にあたるところで、ドイツ語第3部第1章本文の29行目、オランダ語本文の32行目で次のように用いられている。

(Hufeland, C.W.) 「Sie treffen den wichtigen Zeitpunkt der ersten Entwicklung und Ausbildung; Unordnungen in dieser Periode können, wenn sie vernachlässigt oder schlecht geleitet werden, dem Körper fürs ganze Leben eine schiefe Richtung geben;」(257)

(Saxe, J.A.) 「Dezelven vallen in het gewigtige tijdstip der eerste ontwikkeling en vorming voor ; eene ongeregelde handelwijs kan in die jaaren, wanneer dezelve verzuimd of slecht behandeld word, aan het ligchaam voor het geheele leeven eene nadeelige rigting geeven ; 」 (242)

(堀内寛) 「小兒，發生成育之日，多為_レ病芽萌生之時_レ，一旦誤_レ調護_レ，則延_レ巨害於終身_レ，」
(1)

ここではドイツ語でいう Kinderkrankheiten, オランダ語でいう ziekten der kinderen が発達初期をおそうことに注意が向けられている。その処置を誤ると影響するところは大きいとのである。Hufeland, C.W. は Entwicklung と Ausbildung をわけて用いている。前者は内的な必然性にもとづいてあらわれてくる意味, 後者はそれが形づくられていく意味で, 両者を区別と関連において理解しようとしているとみられる。オランダ語では ontwikkeling と vorming が対応している。堀内寛は ontwikkeling に「発生」, vorming に「成育」をあてている。両語の区別は成立しているといつてよい。当時よく用いられていた Halma, F. 『Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen』(1710), (1729), (1758), (1781) には, ontwikkeling は収録されておらず, 稲村三伯『波留麻和解』にもその語は収録されていなかった。宇田川玄真『檢庵韻府』の「卷タルモノガホグレタル」でもなく, 「発生」の訳があてられたのは, 刊本ではこれまでの調査によると堀内寛『幼幼精義』が最初と思われる。vorming の方は, Halma, F. (1729) に「vorming. z. v. formation」として次の例文が収録されている。「De Vorming van't kind in de lijfmoeder」(918) 『波留麻和解』(1796) では「形・形造ル」で例文に訳はない。『(道譯法児馬)』(1833) と『和蘭字彙』(1855~1858) では vorming が「形ドリ」となっており, 例文の訳は「子宮ノ内ニテ子ヲ形トル事」(V-166) となっている。堀内寛がこれに「成育」の訳をあてて, 「発生」との区別と関連を示そうとしたのは, 彼の創案ではなかろうか。

その後の文章の訳を「一旦誤_レ調護_レ，則延_レ巨害於終身_レ，」とまとめたのは, 当時用いられていた司馬遷の『史記』自序にもある「毫釐之失差以千里」などが念頭にあったのかもしれない。堀内寛が仕官した米澤藩主上杉鷹山は『輔儲訓』(1775・安永5年)で「恭敬・遜讓」, 「自得」, 「時習」その他を取り上げて述べた後, 「毫厘に失すれば千里の謬」を引いて当時としては秀れた面をもつ教育論を展開している⁴²⁾。堀内寛には, 蘭学の長じたところは採り, 儒学と共通するところはなお確認するといった態度がうかがえる。

② Hufeland, C.W. は先の①のあと原典で6頁ほどのべてから, 「Periode des ersten und zweyten Jahres」を重視して取り上げ, 10項目にわたって記している。その「第一」, 「第四」, 「第五」で ontwikkeling が用いられている。「第一」は次の1か所で, この時期は「nicht völlig ausgebildetes」であることをのべたところで用いられている。

(Hufeland, C.W.) 「1. Ein Kind ist in diesem Zeitpunkte noch immer als ein sehr unvollkommnes, nicht völlig ausgebildetes Geschöpf anzusehen, indem manche Organe und Kräfte schon vollkommen, manche zur Hälfte, andre noch gar nicht entwickelt sind.」(261)

(Saxe, J.A.) 「1. Een kind is in dit tijdstip nog altoos als een zeer onvolmaakt, niet ten vollen gevormd schepsel te beschouwen, waarin verscheidene werktuigen en vermogens reeds volkomenlijk, verscheidene ten halven, en anderen daarentegen nog in het geheel niet ontwikkeld zijn.」(246)

(堀内寛)「第一、小兒、當一二歳時、宜、做一種未成之活體而見也、試就形臟諸器以論之、則甲器已成、乙器尚是半成、至丙器、則更有未發生者、」(3~4)

年齢のかぞえ方が当時の日本では陰暦の数え年であったので満年齢の訳語があてられていない。しかし、堀内寛の場合、「小兒初生一二歳生齒時」というように Hufeland, C.W. のいつている時期を正しく伝えようと努力をしていることがうかがえる。その説明の後で、「小兒、當一二歳時」と受けとめている。ausgebildetes のオランダ語訳 gevormd を「成熟」の意味に把えて、この時期を「一種未成之活體」とみている。gevormd は Halma, F. (1729) では、「vormen, formé, façonné」となっており、『波留麻和解』(1796)では、「形作タ」があてられている。ontwikkeld は「niet ten vollen gevormd」を説明するために用いられている。堀内寛は、「形臟諸器」においてこれを「已成」、「半成」、「未發生」と把えている。したがってその機能も「不整」、「無序」の面があるし、「薬力所応」もおとなのようにはいかないので誤らないようにすることが真諦であると訳出されている。

「第二」では「幼時形體」から入ってその生理の特徴をのべ、「小兒之病、定原因症候、及薬方者、」の注意すべき事項が三則にわたってまとめられている。さらに「第三」では、関連する注意事項が、「第四」では Kindsalter の発達の特徴と疾病の関係の研究の必要性がのべられている。

③、④「第四」の発達の特徴をのべた最初のところで、次のように用いられている。

(Hufeland, C.W.)「4. Das Kindsalter ist das Alter der Entwicklungen. In keinem Zeitpunkte des Lebens drängen sie sich so, wächst der Mensch so, ist die Natur so anhaltend mit Entwicklung und Ausbildung neuer Organe und Kräfte beschäftigt,」(269~270)

(Saxe, J.A.)「4. De kindsche jaaren zijn die van ontwikkeling. In geen tijdstip van het leeven volgen dezelve zo schielijk op elkander, groeit de mensch zo sterk, is de natuur zo aanhoudend met de ontwikkeling en vorming van nog nieuwe werktuigen en vermogens bezig,」(254)

(堀内寛)「第四、幼時、是為發生期、是以人生、生生真機、運行甚速、身軀日長、形藏精力亦日成立^{スル}、無及此期者、」(8)

ここで Hufeland, C.W. には「das Alter der Entwicklungen」が登場する。オランダ語訳は「zijn die van ontwikkeling」で、名詞の語尾変化はない。堀内寛はこれを「發生期」と訳し、「是以人生、生生真機」としている。この時期ほど、内的なものの「運行」が「甚」だ「速」かったり、「身軀」が「日」に「長」じたり、natuur が「形藏」や「精力」の発生や成育にたずさわるといったことはないとする。そのことが生後1年目を「為小兒丈脆薄時、」にしていると訳出されている。内的な働きが順を追って着手されていくことを示す volgen を「速」で、身軀の成長をあらわす groeien を「長」で訳し分けており、ontwikkeling と vorming もその区別を把えた上で、「形藏精力亦日成立^{スル}」とまとめられている。

⑤、⑥ 先の④をうけて、その説明が行われているところで次のように用いられている。

(Hufeland, C.W.)「Ausbildung der Respirationswerkzeuge, und Regulirung dieses ganzen wichtigen Geschöpfs und des Blutumlaufs durch die Lungen, Entwicklung und seinere Ausbildung der Gehirnorganisation und Seelenkräfte, Entwicklung des Zahngeschäfts, der Sprachwerkzeuge, Wachsthum und Ausbildung des ganzen äußern Menschen」(270)

(Sax, J.A.) 「het vormen der longen, en de regeling van dit geheel belangrijk maakzel en van den omloop van het bloed door de longen, de ontwikkeling en juiste vorming der werktuigen van de herssenen en van de zielsvermogens, ontwikkeling der tanden, der spraak, groei en vorming van den geheelen uitwendigen mensch.」(254)

(堀内寛) 「肺部造構, 呼吸妙機, 血液流行之道路, 腦髓諸器之成形, 漸備而意識發動, 齒牙萌生, 言語已辨, 而後為一箇人身外形.」(8)

呼吸器官の成熟と血液循環の調節, 腦組織および精神力の発生と精巧な成育, 齒が生えて噛む力が強くなり, 初語が発生すること, 体つき全体で人間としての成熟・成長が進むこと, ——これらのことはすべて最初の時期に集中しているとのべる。そのことが肉体を新しく重要な諸変化の持続的な実験室に仕立てることになると指摘する。堀内寛は *vorming* を何に対して用いるかによって, それを単独で, あるいは *ontwikkeling* や *groeien* と一緒に用いる場合などによって, 「造構」, 「成形」, 「為外形」などと訳し分けている。*ontwikkeling* には「發動」, 「萌生」などがあてられている。

⑦, ⑧ これら「一新之變化」は「屬自家發生運行之化」であるとして, 次のように用いられている。

(Hufeland, C.W.) 「Diese Entwicklungen haben ihre eignen Zufälle, und erregen scheinbare Krankheiten, die, wenn man sie bloß als Krankheit, ohne Rücksicht auf ihren wahren Zweck betrachten wollte, gar leicht falsch geleitet und behandelt, und die dadurch beabsichtigten Entwicklungen gehindert, gestört, verspätet oder auch zu sehr beschleunigt werden können;」(270)

(Saxe, J.A.) 「Deeze ontwikkelingen hebben hunne eigenaartige toevallen, en verwekken schijnbaare zickten, welken, wanneer men dezelve enkel als ziekten aanmerken wilde, zonder op derzelve waare oogmerk te letten, alsdan zeer gemaklijk verkeerd geleid, en behandeld, en de daardoor bedoelde ontwikkelingen verhinderd, gestoord, vertraagd of ook al te zeer verhaast kunnen worden;」(254~255)

(堀内寛) 「而非病毒發動之變也, 若或以此真機之發見, 誤為病症, 則謬其事者多矣, 遽然誤調護, 則使發生真機, 或支沮, 或遲滯, 或催促之.」(8~9)

ここでは *Entwicklungen* が初めてオランダ語訳で *ontwikkelingen* になっている。この時期の「自家發生運行之化」としての *ontwikkelingen* は, それ特有の偶発事を伴い, 外見上病変とみられることを引き起こすことがあるが, これは「病毒發動之變」ではない。この偶発事の「真機之發見」をしないでこれを「病症」とみてしまうと, 「調護」を誤ることになるのであって, それによって本来の *ontwikkelingen* が妨げられたり, 乱されたり, 遅らされたり, さらに過度に速められたりすることになるとして, 齒芽萌出時の発熱とそれに対する調護がのべられている。

⑨ 齒芽萌出時の問題のところでは次のように用いられている。

(Hufeland, C.W.) 「z.E. etwas Fieber und Hitze gehört zur Entwicklung des Zahngeschäfts, und wollte man diese durch kühlende ableitende Mittel ganz wegnehmen, so würde man das ganze Geschäft verspäten und hindern.」(270)

(Saxe, J.A.) 「b.v. een weinig koorts en hitte behoort tot de ontwikkeling der tanden, en wilde men dezelve door verkoelende en afleidende middelen geheel wegneemen, dan zoude men het

geheele werk vertraagen en verhinderen.] (255)

(堀内寛)「如_下欲_レ萌_レ出_レ齒牙_一、為_レ發_ホ微熱_上、却與_レ以_レ清熱劑_一、全散_レ其熱_一、是支_レ其真機_一也、多見_レ其無_レ益也、」(9)

歯が生えて嚙む力がそなわり始める時に軽い発熱をみることがある。この熱は冷やすことによって下げることができるであろうが、そうすると生歯にもとづく活動全体を遅らせたり妨げたりすることになるであろうとのべている。ここで注目されるのは、ontwikkingが単に歯が生えたことだけを指すのではなく、それにとまなう活動全体が発生し、例えば嚙む力が発揮されるまでを指していることである。このように機能に着目することは Hufeland, C.W. における ontwikkeling の語の用法すべてにいえることであって、堀内寛もその意味を含めて「発生」などの訳語をあてているとみられる。なお、堀内寛には、これ以前に『骨譜』(1824・文政7年)を譯述した際に、「其九齒芽」で次のようにのべているところがある。「寛曰、小兒生_レ六七月、始生_レ齒時、其萌出之勢直突_レ破齦肉_一也、為_レ刺_レ觸_レ其神經_一而動則發_レ熾_レ熱_レ喘_レ喘_レ痙_レ攣_レ驚_レ搐_レ等_レ之_レ症_一、故_レ預_レ使_レ乳媪_一日指_レ摩_レ齦肉_一為_レ得_レ矣是固先哲定論、今姑贅_レ於此_一、以告_レ保嬰家_一。」したがって、Hufeland, C.W. の指摘しようとした事は堀内寛にとっても理解できていたことと思われる。

⑩ 先の見地からさらに次のようにのべて用いられている。

(Hufeland, C.W.)「Es ist daher wichtig, die Entwicklungskrankheiten mehr zu studieren, auf die bisher wenig oder gar keine Rücksicht genommen worden ist ;」(270)

(Saxe, J.A.)「Het is derhalven van belang, dat men zich meer oefene in de kennis der ziekten welken de ontwikkelingen met zich brengen, en op welken tot hiertoe weinig of in het geheel geen acht geslagen is ;」(255)

(堀内寛)「是故能知_レ其病_一是_レ非_レ真_レ病_一、而生_ホ於_レ發生運行之_レ為_上、則不_レ問_レ而可也、可_レ觀_レ此期所_レ發_レ之_レ症_一、」(9)

ここに至って Hufeland, C.W. によって Entwicklungskrankheiten という概念が提出される。Saxe, J.A. は、「der ziekten welken de ontwikkelingen」と訳している。これまでは少ししか、あるいは全く顧みられてこなかった「生於發生運行之_レ為_上」病についてもっと研究をすることが重要であるとする。正確な調査研究によって、この年齢にみられる病には本来の病ではないものがあること、一般的には適切かもしれない「治則」も、ここでは不合理かつ不適切なものになりうるということが明らかにされなければならないとする。

「発生期」における「自家發生運行之化」を明らかにして「調治之法」を誤らないようにすることが強調された後、「第五」以降では小児の「流動諸液」の内、主として「血液」と「脳髓」の関連が取り上げられて「調治之法」がのべられる。次の「第五」では5か所に ontwikkeling などのがのべられている。

⑪ この頃の頭脳は、その大きさと各部の柔軟さとのバランスによって血液と体液の集積体として整ってきているとして次のようにのべられている。

(Hufeland, C.W.)「wird nun noch mehr durch die beständig darinne vorgehenden wichtigen Entwicklungen und Schöpfungen der Sitz einer beständigen Ueberfüllng und örtlichen Vollblütigkeit.」(271)

(Saxe, J.A.)「nu nog meer door de geduuriglijk in hetzelve voorvallende belangrijke ontwik-

kelingen en vormingen de zitplaats eener aanhoudende overlaading en plaatselijke volbloedigheid.] (256)

(堀内寛)「然⁷況人生發生形成之妙機，常⁷動而不⁷休⁷乎，豈得⁷不⁷為⁷蓄⁷多血⁷生⁷壓迫諸症⁷之定所⁷乎，」(10)

「Entwicklungen und Schöpfungen」がオランダ語で「ontwikkelingen en vormingen」となっているのは何故であろうか。堀内寛は「發生形成」としている。Hufeland, C.W. は頭腦を發生と血液の吸収を基に創造の営みをするところとみて、そのために、内部は絶えず「蓄⁷多血⁷」となり、「生⁷壓迫諸症⁷」の「定所」となるとみる。

⑫ それに加えて、ますます感受性を高めつつある感性は、断えず局所的な刺激を受けて、次第に目覚めつつある感覚で多くの新しいまだ不慣れな印象を受け取り伝える。そのことが次のようにべられ用いられている。

(Hufeland, C.W.)「Welchen unaufhörlichen Lokalreiz erhält hier nicht die sich immer mehr entwickelnde Sinnlichkeit, und die Menge der neuen und ungewohnten Eindrücke, die die nach, und nach erwachenden Sinne erhalten und mittheilen!」(272)

(Saxe, J.A.)「Welk eene onophoudelijke plaatselijke prikkelbaarheid verkrijgt hier niet de zich fleeds meer ontwikkelende zinnelijkheid, en de menigte van nieuwe en ongewoone indrukzelen, welken de allengskens ontwaakende zinnen bekomen en mededeelen!」(256)

(堀内寛)「當⁷此時⁷，腦神日⁷敏⁷一日⁷，感徳日⁷新⁷一日⁷，豈得⁷不⁷發⁷此⁷常常刺衝⁷乎，」(9)

⑬ 別のところでは、次のように「精神力の發生とそれに必要な腦器官の育成」という用い方がみられる。

(Hufeland, C.W.)「ist das große wunderbare Geschäft der Entwicklung der Seelenkräfte, und der Ausbildung der dazu nöthigen Gehirnor-gane,」(272)

(Saxe, J.A.)「bestaat in het groote wonderbaare werk van de ontwikkeling der zielsvermogens, en van de vorming der daartoe vereischte werktuigen der herssenen,」(256~257)

(堀内寛)「實出⁷於⁷神機發生，與⁷腦髓諸器形成之大作用⁷者多矣，」(9~10)

⑭ 又、次のようにも用いられている。

(Hufeland, C.W.)「Hierdurch muß nun wieder ein beständiger vermehrter Antrieb des Bluts entstehen, der eben zu jener Entwicklung und ihrer Beschleunigung nöthig ist.」(273)

(Saxe, J.A.)「Hierdoor moet nu wederom een gestadiglijk vermeerderde aandrang van bloed ontstaan, welke juist tot deeze ontwikkeling en derzelve bevoordering noodzaaklijk vereischt word.」(257)

(堀内寛)「是以所⁷必需⁷於⁷生生發達⁷之血液，乃常常盈進，以壓⁷迫於腦內⁷也，」(10)

⑭の前にくる文章を堀内寛は次のように訳している。「夫腦髓漸成，神機始發時，(中略)其精神興發之全機，實唯在⁷頭中⁷，而不⁷足⁷發⁷越⁷於外⁷」と。この後で、いまや再び絶えることなく増大されてきた血液の原動力が腦の働きの發生とその促進にとって必要であることが訳出されている。「生生發達」のオランダ語は「ontwikkeling en derzelve bevoordering」で、これまで發生などと訳されていた ontwikkeling に始まる語を「發生成育」などのように二語合成をするので

なく、新しく四字熟語に総合して「生生発達」としている。しかも「発達」の語で次にのべるような意味をあらわそうとしているとみられる点が注目される。

「発達」は当時の蘭医学では体の「流動諸液」の働きに用いられていた語でもあったようである。すなわち、大槻玄澤述『重訂解體新書』（1826・文政9年）の「卷之六 本編卷一 翻譯新定名義解 下」では「流動諸液」の「膽液」(gal)の働きを次のように説明しているところがある⁶⁾-①。

「(前略) 每熨_レ滴_ニ於_レ膽管_ニ。注_レ入_ニ十二指腸_ニ。主_レ尅_レ化_シ飲食_ヲ分_テ泌_ス乳糜_ヲ。益_レ此_レ液_ヲ以_テ有_ニ其_レ雄悍壯熱之火德_ニ。能_レ立_ニ開透_ニ發達_ニ之功_ヲ。故_ニ其_レ入_ニ腸中_ニ也。熱_レ沸蒸_ニ熱_ニ。以_テ糜_レ爛_ニ水穀_ヲ。猶_レ醅_ニ醴_ニ於_レ酒漿_ニ。非_レ此_レ不_レ釀_ニ熟_ニ。(中略) 凡_レ身體_ヲ爲_ニ火行_ニ溫熱_ニ之營_ニ爲_ニ者_ニ。皆_レ賴_ニ於_レ此_レ液_ニ之保_ニ續_ニ矣。」(16~17)

杉田玄白『解體新書』（1774・安永3年）にはこのような説明はなかった⁴³⁾。晩年の大槻玄澤にはこのように、膽液が十二指腸に注入されることによって、腸中に入って腸の働きが活潑になることを指して「開透発達」という説明をしているところがみられる。堀内寛の場合も、血液が脳に吸収されて、脳の働きが活潑になることを指して「生生発達」と用いているとみられる。いずれもこのようにみられるとすれば、「有用」な「流動諸液」が体内で順調に働き、それが他の有用な器官に流入してその器官の機能が本来の働きを活潑に、あるいは新しい水準での営みをするようになることに対して「発達」の概念が用いられていたことが考えられる。この点に関してはさらにオランダ語との対訳の検討を行うことと、漢方などでは「発達」の語がどのように用いられていたのかについての吟味が必要となる。

⑮ 「第五」の終わりに近い部分で、この時期の *natuurlijk opvoeding* 「保嬰之道」や *geneeskundige behandeling* 「調治之法」において心掛けておくべきこととして、Hufeland, C.W. は「kopf frey erhalten」をあげている。Saxe, J.A. は「hoofd onbezwaard gehouden」と蘭訳し、堀内寛は「輕_ニ清_ニ頭腦_ニ、防_ニ禦_ニ鬱_ニ蓄_ニ者_ニ、實_ニ爲_ニ第一_ニ要_ニ務_ニ也」としている。Hufeland, C.W. の見解としては、最近はその効用が一般に認められてきたが、以前はそうではなかったので、頭部を充血させて内的なものの発生を過度に促進させるなどして、多くの特発的な病気を引き起こしたり、それ以外にも、間接的にクル病や腺病などの有害な要因ともなってきたと指摘する。

(Hufeland, C.W.) 「ziemlich allgemein anerkannte Nutzen des Kühlhaltens des Kopfes, so wie gewiß in vorigen Zeiten das zu warme Verhalten desselben dadurch vorzüglich schädlich wurde, daß es die Kongestionen daselbst fixirte, die Entwicklungen zu sehr beschleunigte, und außer einer Menge idiopathischer Uebel, mittelbar selbst zu skrophulösen und rachitischen Zufällen den Grund legte.」(276)

(Saxe, J.A.) 「inzonderheid het in onze tijden taamelijk algemeen aangenoomen heilzaam gebruik van het hoofd koel tehouden, daar het zeker is dat het al te warm houden van hetzelfde daardoor in voorgaande tijden bijzonder nadeelig werd, dat het de ophoopingingen daar in bepaalde, de ontwikkelingen al te zeer verhaastte, en behalven eene menigte van plaatselijke gebreken, onmiddelijk zelfs den grond legde tot kliergezwellen en Engelsehe ziekte.」(260)

(堀内寛) 「人皆知_レ輕_ニ清_ニ頭腦_ニ之利_ニ、而始_レ悟_ニ昔_レ時_レ溫_ニ覆_ニ之_レ大_ニ害_ニ於_レ人_ニ也、夫_レ諸_レ液_ニ鬱_ニ蓄_ニ、則_レ過_レ促_ニ發_ニ生_ニ天_ニ機_ニ、遂_ニ爲_ニ巨_ニ害_ニ、直_ニ爲_ニ英_ニ吉_ニ利_ニ亞_ニ病_ニ、腺_ニ腫_ニ之_レ源_ニ、是_レ故_ニ小_ニ兒_ニ幼_ニ時_ニ、內_ニ導_ニ外_ニ泄_ニ頭_ニ中

諸液_者、實是要道、」(11~12)

以上のように ontwikkeling などの訳は15か所で行われている。『幼幼精義』の第二篇は痘瘡の症候と治則、症例検討などである。ここでも症候で「見熨期」,「貫膿期」,「乾収期」が区別され、論じられるなど、疾病生成の時期区分が行われて論じられている。

いま一つ注目されるのは、堀内寛は「幼幼精義」附録として輯纂した『名稱義略』の二番目の語として「發生期 原名溫多物法林屈參乙度」をあげて、「發生者、小兒初生、諸機漸將_レ發之候、猶_レ草蓀初生、木芽初發、待_レ風行雨施之化_レ時_也」とのべていることである³⁷⁾。これまで Hufeland, C.W. の説を訳してきたことをもとに、堀内寛は、ここでは「發生期」を、いまでいう乳児期を中心にみて、諸機能が發揮され始め、外からの働きかけによる「化」育を待っている時期、と把えていたことがわかる。それは Hufeland, C.W. のいうように疾病にかかりやすく、また「調治之法」にも独自の配慮が必要な時期、したがって堀内寛には「化」育の効果ももたらされる時期とみられたのであろう。実はこの「化育」の語については、杉田玄白『解體新書』(1774)の吉雄耕牛の序で「世醫之有志者因以知保物之所生毓百骸之所在而施厥術則上自王侯下至烝庶凡有生氣者庶幾將不夭其天年也」と「生毓」を知ることの重要性がのべられていた⁴³⁾。大槻玄澤は『重訂解體新書』(1826)でこの序をも変えている。その結果、「生毓」という古字の部分は「保物之所化育明審百骸之具備」となっている^{6)①}。「生毓」から「化育」になっているとしても、医学の基礎の解剖学を学ぶ上で堀内寛の訳出した「発生成育」にあたることを心得ることは重要なことであるとみられていた。それがここに至って「發生期」との関係で把える課題のあることが明らかにされてきた点は注目されてよいと思われる。「發生期」は ontwikkelingstijdperk であるが、当時は perk を除いた用い方があったのであろうか。ともあれ、ontwikkelen が大槻家の『波留麻和解』に「包ナド鮮ク」と書き入れされ、あるいは宇田川玄真の『檢籠韻府』で「卷解、又通誦スル」があてられ、さらに ontwikkeling が「卷タルモノガホグレタル」と収録されていたのにくらべると、堀内寛の『幼幼精義』では ontwikkeling に「發生」の訳をつけ、「名稱義略」で「發生期」を取りあげて定義を与えていることは、これまでの調査でみる限り、小児科という分野に限定されているとはいえ、画期的なことといえよう。

これとは別に有用な「流動諸液」において「發達」という概念も、それが次の器官に作用し、そこで新しい働きがもたらされることに対して用いられていたらしいことがわかった。このような「發達」の語の用法は大槻玄澤と堀内寛によって1820年代後半以後に用いられ始めたこととみられるのであって、宇田川玄真の『和蘭内景醫範提綱』(1805)の「提綱釋義」卷之二の膽液の説明の同じところでは「透發。開達」となっていたものである⁴⁴⁾。したがって、宇田川玄真が『檢籠韻府』で ontwikkelen と ontwikkeling を取り上げて和譯し、「流動諸液」の膽液などに「開達」などの説明をつけていたものを、堀内寛は、小児科の分野で ontwikkeling に「發生」の訳を与えて定義をし、「流動諸液」の働きには「發達」の説明をあたえているという宇田川玄真と大槻玄澤や堀内寛の間の訳語の変化をみることができた。ontwikkelen と「發生」の対応、そして「發達」の語の意味は蘭医学においてこのように準備されたこととみられる。

なお、堀内寛の場合、「發生」の語は黒川良安、青木研藏との共訳で未刊に終わった『醫理學源』(1844・弘化2年)にもある³⁷⁾。この書は、Richerand, A. 『Nouveaux éléments de physiologie』(1801)を Erpecum, A. がオランダ語に訳して『Nieuwe Grondbeginselen der Natuurkunde van

den Mensch] (1826) としたものを重訳したものである。ここには「卷之一」に5か所、「卷之二」に4か所「発生」の語が用いられているので、堀内寛は同じ頃「発生」を用いたとみられる³⁷⁾。この Richerand, A. については堀内寛ら以後にも数種の訳書があるので、それらをフランス語とオランダ語と対応させて次稿で取り上げる予定である⁵²⁾。堀内寛の他の著述にはこれまでのところ「発生」の語を用いているものは見つかっていない³⁸⁾②。

Hufeland, C.W. のものはこれ以後『Enchiridion Medicum』の第2版(1836)の Hageman, H.H. によるオランダ語訳『Prchirdin Medecum』(1838)が緒方洪庵によって『扶氏經驗遺訓』(1858～1861・安政5～文久元年)として刊行され、そこで残された「Diagenotiek, idtuog, gnomiek」が青木浩齊によって『察病龜鑑』(1853・嘉永6年)として、また山本美致美によって『扶氏診断』(1858・安政5年)として刊行された⁴⁵⁾。この診断学の方でも Hufeland, C.W. は ontwikkeling の語を用いており、堀内寛が「発定期」とした語は青木浩齊によって「生育遂序ノ時限」とか、山本美致美によって「発生ノ期」などと訳され、Canstatt, C. の訳でも坪井信良が『侃斯達篤内科書』(1864・元治元年)で「生力発成ノ時」との訳を用いるなど、発定期に注目された訳出が行われて、蘭医学におけるこの概念の準備は引き継がれることになったとみられる⁴⁶⁾。これらはいずれも当時までに清から渡来していた『幼幼集成』(1750)などと共にあっても、重要な役割を果たすことが期待される内容のものであった⁵⁰⁾。Hufeland, C.W. のものについては、堀内寛『幼幼精義』(1843)より以前に、新宮涼庭によって羽戎歌郎突『泰西疫論前篇』(1824・文政7年)、『疫論後篇』(1835・天保6年)が刊行されている⁴⁷⁾。ここでは、例えば『前篇』の「第四十章」で「香竄揮發ノ薬」の薬効について「脉洛筋骨纖微ノ間ニ至ルマデモ穿チ入ル事ヲ得、故ニ邪ニ會テハ之ヲ解散シ、神經ニ觸レテハ之ヲ刺撃衝動シテ、邪ノ為メニ壓閉セラレテ、其働キ將ニ廢絶セントスルヲ發セシム、是ニ於テ神經動ク事ヲ得テ、排發ノ機自ラ生シ、驅邪ノ功由テ成ル者ナリ」(34)などとのべられている。又、薬を用いる時期には症状経過に注意すべきことをのべて、例えば『後篇』「第二章」の「發汗利尿剂」では、「初メ七日ハ發生日期、中ゴロ七日ハ釀熟日期、終リ七日ハ分利日期」として、「發生ノ日期ニ於テハ、病毒未タ熟セザルヲ以テ、汗尿ニ分利スル事稀ナリ、徒ラニ用ユレバ患者ヲ疲勞セシム」(4～5)と指摘されている。当時はまだ細菌学や生化学などは未開拓であった。

こうした説明からもうかがえるが、阿知波五郎によると、Hufeland, C.W. は生氣論医学(vitalistic medicine)の流れを汲んでいるとされる。彼は Kant, I. や Goethe, J.W. von さらに Schelling, F.W.J. von の影響を受けて独自の levens-kracht という概念を用いている。阿知波によると、石川遠は Brink, C.H. の蘭訳本から『原病』を訳し、その「語解」で levens-kracht に「生活力」の訳をあて、「生活力ト称スル時ハ、機能ヨリ發セシムルモノヲ合セテ之ヲ含ム」としてのべたことである⁴⁸⁾。この点から病氣を受身的にだけ把えるのではなく、生活力の反応と考え、内在的な自然治癒力を重くみて薬効やその働く時期をとらえて、医師の仕事はその働きを援助することにあると考えていたと指摘されている。

高野長英『西説醫原樞要』(1832・天保3年)も「活力ハ凝體ニ在テ活機ヲ發シ流體ノ運動ヲ起ス」などとして、「感動激發ノ性」や、「運化ヲ起發」することや、「胃病ヲ兼發」することなどをのべている⁴⁹⁾。この「活力」は levens-kracht を指すものとみられる。

小関三英も、当時、ドイツの Consbruch, G.W. の医学概説書を Meppen, N.C. がオランダ語

に訳したものを工私蒲略僱『内科集成』(時期未詳)として重訳した後、扶歇郎度を兼取して『西醫原病略』(1832・天保3年)を譯述刊行しているが、ここでも「學語略説」の最初に「元氣(權甸)ヒス ヒタリス(和蘭)レーヘンス・カラクト」を取り上げている⁴⁹⁾。そして、これは「一身萬機ヲ總領シテ生活ヲ保全スル所ノ主宰。此ヲ元氣ト名ツク。其物タル形状得テ見ルベカラズ。所在得テ知ルベカラズ。只身體ニ發見スル所ノ外候ニ就テ粗^ホ其情情ヲ辨スベキナリ。夫レ天地間。諸氣混合分離シテ自ラ調和シ。萬物ヲ變化生育スル機アリ。此ヲ「ナチュラル・レイケ エンシケイキェンジゲ・ウェッテン」と云。譯シテ自然分離機トナス。金礦動植悉ク元質ヲ斯ニ得テ以テ生長ス。但シ金礦ハ自ラ運化スル機ナシ。故ニ専ラ分離機ノ長育スル所ニ係ル。動物ト植物トハ分離機ニ資ッテ而シテ更ニ自ラ運化營為スル機アリ。(中略)動物ハ飲食ニ由テ自ラ^{ヤシナ}頤フノミナラズ。腠理ト吸氣トニ由テ居恒^{ツネ}ニ外氣ノ養ヲ受ケ。分離機ト接ス。是ニ於テ活體中一個ノ力有テ分離機ヲ奪却シテ己レガ有トナシ。此ヲ制化シテ自家ノ政令ニ從ガハシメ以テ活體諸器ノ運営ヲ施シ。生生不休ノ用ヲ為ス是即チ元氣ナリ。元氣ハ活體中ニ限りテ^{マツリゴト}政ヲ為スモノナリ。故ニ活體界外此ニ比スベキノ物ナシ。(後略)」と24行にわたる説明をしている。この「元氣」がさらに興奮機、刺衝機、知覺機等によって新しい働きをしていくとみられていた。

蛮社の獄の犠牲者小関三英や高野長英と親しかった堀内寛は「元氣」あるいは「活力」と訳されたものを参考にしたのであろうが、訳語は岡研介の用いた「生力」を使い『幼幼精義』の「名称義略」では扶歇蘭度によるとして次のようにのべている³⁷⁾。「生力 原名^{レイヘンス・カラクト}勤奮斯加刺窟咄」。「凡物、有_レ體用_ニ、體也者、所_レ藏_ニ其用_ノ之機、而用也者、取_レ出_ニ於_レ體_ノ之發也、萬生無_レ生、則死矣、生之生也、夫何以為_レ其體_ノ乎、生者用也、非_レ體也、然則、外物刺_レ衝_ニ於_レ吾_ノ者、體乎、日否、是亦非_レ體也、(中略)生力者、一身_ノ主宰、生命_ノ根基、存則生、亡則死、(寛按、漢人所_レ謂_ニ元氣_ノ近_ニ之)夫生機之發也者有_レ二、一日_ニ、刺衝之發_ニ、生力感_レ刺衝_ニ、以抗_レ之、是也、二日_ニ、舍密之發_ニ、生力變_レ物質自然之分合_ニ、以見_レ活體自家舍密之妙化_ニ、是也、」

「現候」するものをもたらすのが「カラクト」であり、それは物質の「相合著」する力によってもたらされるとみる。ここにはカント哲学の影響がみられるとされている。この生氣論医学はドイツ医学の後進性のゆえとも指摘されているが、漢方における「氣」の道教的思惟と親和性をもって受け入れられやすかったのではないかとみられる。『解體新書』の吉雄耕牛の序にも「生氣」があったし、堀内寛もドイツの Hufeland, C.W. のものだけでなく、フランスの Richerand, A. のものを訳した『醫理学源』でも「生氣」や「發生」を用いて説明を行っている。Hufeland, C.W. の場合は、彼の生氣論医学の立場から、その営為には「小兒固有ノ諸件」があることを強調するのであって、彼の晩年の遺著ともいべき『Enchiridion medicum』(1838)の診断学や小児病のところにもそれがまとめられている。

しかし、これらが緒方洪庵や青木浩斎、山本美致美や、さらに関連して坪井信良らによって紹介されるのは、いずれも開国後になって、1855・安政2年に洋学所が設置され、1856年にそれが蕃書調所と改称され、翻訳書の認可がここで行われるようになってから後のことである。堀内寛『幼幼精義』が翻譯されたのは1839・天保10年とされる³⁸⁾②。この時期は、シーボルト(Siebold, Ph.Fr.)事件(1828)の後、大塩平八郎の乱によって、幕府はその支配に不安をもっていた頃とされている。蛮社の獄(1839)が引き起され、堀内寛が親しくしていた小関三英が自殺し、高野長英も投獄されている。そして、これを機に幕府の方針として、1840年には天文方に訳書の流

布の禁止措置がとられた。さらに1842・天保13年には和譯洋書の出版は漢方医の元締である医学館で検閲の上、町奉行の許可制となって、事実上和蘭医書の上木は止められることになった。1939・天保10年に訳稿はでき上がり、1845・弘化2年に刊行されたともいわれている『幼幼精義』が1843・天保14年開雕となっているのはこの間のことを示すのであろうか。やがて1844、1845年を経て、和譯蘭書の出版は天文方が検閲をすることになる。この時に『幼幼精義』が世に出る機会を得ることになった。恐らく、米沢藩および各巻の序文、跋文を書いた協力者の力も大きかったことでもあろう。実は、この年、堀内寛は脱獄した高野長英をしばらくかくまっている³⁸⁾。ところが、再び、1849年には和訳医書の出版は医学館の検閲を受けなければならないことになり、1850・嘉永3年には和蘭書の翻訳刊行には大幅な制限が加えられることになった。例えば、1850年に提出された緒方洪庵の『扶氏經驗遺訓』の出版何かが許可されることなく留め置かれ、その刊行は7年後の1857・安政4年になるまで、つまり1856・安政3年開国後、翻譯洋書の検閲事務が蕃書調所に移されるまで遅らされることになったのはこのためであったと指摘されている⁵¹⁾。

堀内寛『幼幼精義』(1845)はいわばこのような時代の間隙に陽の目を見たのである。日本における牛痘接種が行われたのは1849・嘉永2年からであるが、その普及と重ねてみる時、両者はまさに、日本の子どもたちの歴史に、18世紀の“Siècle des Lumières”の光が射し、それが存在するものであるならば、内なる「レーベンス・カラクト」が輝きをもち始めることにもなろうという時であったのである。開国の約10年前、時代は鎖国から開国へ、その扉を開こうとする前に、杉田、大槻、宇田川、坪井の各学統の成果を受けた堀内寛によって、ontwikkelingに「發生」の訳があてられ、意味が把らえられた。

翻訳刊行された医書以外の領域の蘭書で ontwikkeling に發生や發達の訳がつけられているものとしては、これまでの調査に基づく、神田孝平重訳『經濟小學』(1867・慶応3年)と内田正雄訳『和蘭學制』(1869・明治2年)がある⁵²⁾。堀内寛の『幼幼精義』はこれらの社会科学関係書よりも約4分の1世紀早い。そのような時点での刊行書で ontwikkeling などについての検討と翻訳がなされていた事実は、日本における發達の概念の翻訳・導入の考察にあたって、もっと重視されなければならないことではないかと考える。それは時期的にみれば、今から150年前に、鎖国という夜明け前の時代を開く東雲か、そこに微かな光芒の一つが確実に「發生」したことを示す出来事にあたるようにも思われる。

註

- 1) 本稿は、次の①、②、③の論文で扱った時代を蘭学にまで遡るもので、③の論文の「註2)」-①の蘭学に関する第1部である。関連稿として④がある。
 - ① 田中昌人：文明開化期における發達の概念の導入について——Hepburn, J.C. と中村正直の場合——京都大学教育学部紀要第34号。1988. 93~104.
 - ② 田中昌人：わが国におけるカリキュラム改革と發達研究の出発——西周における「理の辞の說」の検討をもとに——京都大学教育学部B部門共同研究報告論集。1990. 14~27.
 - ③ 田中昌人：日本における發達の概念の導入について——Perry, M.C.; Harris, T.; Alcock, R. の場合——京都大学教育学部紀要第37号。1991. 46~75.
 - ④ 田中昌人：日本における發達の概念の導入について——江戸時代に渡来した日本見在17・18

世紀刊行洋辞書の検討——京都大学教育学部B部門共同研究報告論集. 1993. (印刷中)

- 2) 青木昆陽の資料は下記を用いた。
 - ① 『和蘭貨幣考』(1742), 『和蘭話譯』(1743), 『和蘭文字略考』(1746), 『和蘭文訳 六集』(1754) は静嘉堂文庫大槻文庫および国立公文書館内閣文庫所蔵の自筆本および京都大学文学部文学科閲覧室所蔵写本。
 - ② 沼田次郎・松村明・佐藤昌介：洋学 上 (日本思想大系 64). 岩波書店. 1976. 9～66, 571～580.
- 3) 青木昆陽のオランダ語に関しては次を参照した。
 - ① 斎藤信：初期のオランダ語学習——青木昆陽を中心として——. 金沢大学法文学部論集 文学篇第5巻. 1958. 31～43.
 - ② 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 II —— 蘭学者による蘭語の学習とその研究—— 早稲田大学出版部. 1977. 49～105. なお, 同書 III —— 対訳語彙集および辞典の研究—— 1978. 459～480. も参照。
 - ③ 片桐一男：青木昆陽の『和蘭文譯』とその原書について. 片桐一男：阿蘭陀通詞の研究. 吉川弘文館. 1985. 561～616. 片桐氏はこの原書を, Hakvoord, B.: Oprecht Onderwys van de Letter-Konst. の1727年版と推定されている。
- 4) 前野良澤の資料は下記を用いた。
 - ① 『蘭譯筈』(1771), 『和蘭譯筈』(1785) は静嘉堂文庫大槻文庫および京都大学文学部文学科閲覧室の各所蔵写本。
 - ② 沼田次郎・松村明・佐藤昌介：洋学 上 (日本思想大系 64). 岩波書店. 1976. 67～126, 580～586.
 - ③ 『仁言私説』(時期未詳) に関しては京都大学文学部文学科閲覧室所蔵写本。
- 5) 前野良澤のオランダ語に関しては次を参照した。
 - ① 岩崎克己：前野蘭化. 岩崎克己発行. 1938.
 - ② 斎藤信：蘭語学者「前野良澤」——「日本におけるオランダ語発達史」の或る章. 名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」第7巻. 1961. 19～44.
 - ③ 松村明：「前野良澤の『和蘭訳文略』について」, 「前野良澤の『蘭譯筈』, 『和蘭譯筈』について」. 洋学資料と近代日本語の研究. 東京堂. 1970. 51～83, 85～96.
 - ④ 斎藤信：前野良澤の『蘭譯筈』について. 名古屋市立大学教養部紀要第16巻. 1972. 49～69.
 - ⑤ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 II —— 蘭学者による蘭語の学習とその研究——. 早稲田大学出版部. 1977. 174～400. onthouden の訳に関しては209ページを参照。なお, 同IV —— 321～353. も参照。
 - ⑥ 杉本つとむ：解體新書の時代——江戸の翻訳文化をさぐる——. 早稲田大学出版部. 1987.
- 6) 大槻玄澤の資料は下記を用いた。
 - ① 『蘭学階梯』(1788), 『蘭訳要訣』(時期未詳), 『蘭譯梯航』(1816) は京都大学文学部文学科閲覧室所蔵写本。『重訂解體新書』(1826) は京都大学医学部図書館所蔵富士川本。
 - ② 沼田次郎・松村明・佐藤昌介：洋学 上 (日本思想大系 64). 岩波書店. 1976. 315～400, 594～599.
- 7) 大槻玄澤のオランダ語に関しては次を参照した。
 - ① 斎藤信：「日本におけるオランダ語発達史」の或る章—— I. 建部清庵由正について, II. 大槻玄澤の業績——. 名古屋市立大学教養部紀要 (人文社会研究) 第4号. 1958. 44～64.
 - ② 佐藤栄七：大槻玄澤の著訳書について. 蘭学資料研究会研究報告第120号. 1962. (復刻版蘭学資料研究第8巻. 1986. 125～133.)
 - ③ 緒方富雄：大槻玄澤——蘭学の土台をかためる. 緒方富雄編：江戸時代の洋学者たち. 新人物往来社. 1972. 88～91.
 - ④ 吉田忠：大槻玄澤, 玄幹父子の西遊と志筑忠雄. 長崎談叢第59号. 1976. 1～24.
 - ⑤ 片桐一男：大槻玄澤の長崎遊学と阿蘭陀通詞. 日本歴史第349号. 1977. 1～18.

- ⑥ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 II —— 蘭学者による蘭語の学習とその研究 ——. 早稲田大学出版部. 1977. 401~526. 大槻玄澤が行った接頭辞, 接尾辞の吟味については, 467~488ページ, 「解體」の語の吟味については517~519ページを参照。なお, 同IV —— 403~477. も参照。
- ⑦ 洋学史研究会編：大槻玄澤の研究. 思文閣出版. 1991.
- 8) 富士谷成章の国語学的成果については次を参照した。
- ① 不盡谷氏口傳・吉川彦富・山口高瑞筆受『かさし抄』(1767), 『あゆひ抄』(1778)は京都大学附属図書館蔵本。
- ② 竹岡正夫：富士谷成章の学説についての研究. 風間書房. 1971.
- 9) 宇田川玄隨の資料は下記を用いた。
- 『西説内科選要』(1793)は京都大学医学部図書館富士川本, 『蘭譯弁髦』(1793)は京都大学文学部文学科閲覧室, 『蘭學秘藏』(時期未詳)と『西洋醫言』(時期未詳)は早稲田大学図書館特別資料室洋学文庫の各所蔵本。
- 10) 宇田川玄隨のオランダ語に関しては次を参照した。
- ① 杉本つとむ：『蘭譯弁髦』に関する考察 —— 宇田川玄隨とその蘭語学 ——. 武蔵野女子大学紀要第6号. 1971. 61~82.
- ② 杉本つとむ：宇田川晋撰『蘭學秘藏』の考察 —— 志筑忠次郎, 助辞考 ——. 武蔵野女子大学紀要第9号. 1974. 94~107.
- ③ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 II —— 蘭学者による蘭語の学習とその研究 ——. 早稲田大学出版部. 1977. 685~835.
- ④ 杉本つとむ：蘭語学とその周辺. 櫻楓社. 1981. 85~134.
- 11) 石川玄林『蘭語口授』(1825)は武田科学振興財団杏雨書屋所蔵本。
- 12) 中野柳圃(志筑忠雄)関係のオランダ語文法書などは下記を用いた。
- ① 『(柳圃中野先生文法)], 『蘭語九品集』, 『虚辞解』, 『蘭語訓解』(いずれも時期未詳)は京都大学文学部文学科閲覧室所蔵写本。
- ② 『蘭学生前父』は雄松堂版マイクロフィルム『初期日本蘭佛独露語文献集』(1985)のR4, 『虚詞考』, 『助詞考』は同R19。
- ③ 吉雄俊藏『六格明辨』, 『三種考』, 『譯規』と野呂天然『九品詞略』(いずれも時期未詳)は京都大学文学部文学科閲覧室所蔵写本。
- 13) 中野柳圃(志筑忠雄)のオランダ語文法書などの研究論文については次を参照した。
- ① 斎藤信：文法領域の開拓とその発達 —— 「日本におけるオランダ語発達史」の或る章 ——. 名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」. 第5巻. 1959. 11~33.
- ② 沼田次郎：文化文政期の蘭学について —— 志筑忠雄と馬場貞由 ——. 日本女子大学史学研究会「史艸」第7号. 1966. 1~13.
- ③ 斎藤信：『柳圃中野先生文法』について. 名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」第14巻. 1970. 85~104.
- ④ 斎藤信：中野柳圃の『四法諸時対訳』について. 名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」第17巻. 1973. 27~51.
- ⑤ 斎藤信：江馬家所蔵のオランダ文法書について —— 特に中野柳圃の『三種諸格編』と著訳者不明の『助字要訣』について ——. 名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」. 第18巻. 1974. 89~103.
- ⑥ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 —— 長崎通詞による蘭語の学習とその研究 ——. 早稲田大学出版部. 1976. 265~576. 荻生徂徠については, 500および562~576. 長崎通詞の江戸蘭学に対する貢献については29~262. を参照。なお, 同IV —— 117~142. も参照。野呂天然については, 520~561, 吉雄俊藏については946~1072. を参照。
- 14) 馬場貞由のオランダ語文法書などは下記を用いた。
- ① 『蘭語首尾接詞考』(1808)と『諸厄里亜語忽兒朗土語集成』(時期未詳)は京都大学文学部

文学科閲覧室、『西文規範』（1811）と『和蘭文範摘要』（1814）は京都市立西京商業高等学校図書館平野文庫、『蘭学梯航』（1816）は武田科学振興財団杏雨書屋と京都大学文学部図書館文学科閲覧室の各所蔵本および写本。

- ② 『魯語』（1811）と『魯語文法規範』（1813）は静嘉堂文庫大槻文庫所蔵本。
- ③ 奥平昌高編『蘭語譯撰』（1810）と藤林晋山『和蘭語法解』（1812）の馬場貞由によるオランダ語序文は京都大学文学部文学科閲覧室所蔵本。
- 15) 馬場貞由のオランダ語文法書などの研究論文は次を参考にした。
- ① 板沢武雄：洋学界の新進馬場兄弟。歴史教育。第6巻第11号。1958。36～41。
- ② 沼田次郎：馬場貞由関係の資料について。蘭学資料研究会研究報告第198号。1967。1～6。
- ③ 井田好治：文化年間における長崎の西洋（蘭・仏・英）文法論。九州文化史研究所紀要第12号。1967。81～124。
- ④ 片桐一男：阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績。法政史学第21号。1969。73～88。
- ⑤ 片桐一男：阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者達。法政史学第22号。1970。81～93。
- ⑥ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開——長崎通詞による蘭語の学習とその研究——。早稲田大学出版部。1976。577～866。なお、同IV——143～194。も参照。
- ⑦ 片桐一男：阿蘭陀通詞馬場佐十郎のオランダ語学。青山史学第5号。1977。43～70。
- ⑧ 茂住実男：天文方における外国語学習法——馬場佐十郎を通して——。青山学院大学教育学会教育研究第25号。1981。27～53。
- ⑨ 片桐一男：阿蘭陀通詞の研究。吉川弘文館。1985。514～557。
- ⑩ 杉本つとむ：江戸洋学事情。八坂書房。1990。113～137。
- 16) 藤林晋山のオランダ語文法書などの資料は下記を用いた。
- 『Nederduitsche TAAL・譯鍵 凡例附録』（1810）、『蘭學逕』（1810）と『和蘭語法解』（1812）は京都大学文学部文学科閲覧室所蔵本。
- 17) 藤林晋山のオランダ語文法書などの研究論文については次を参照した。
- ① 山本四郎：蘭学の泰斗藤林晋山先生伝。藤林晋山先生景仰会。1957。
- ② 斎藤信：文法領域の開拓とその発達——「日本におけるオランダ語発達史」の或る章——。名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」第5巻。1959。11～33。
- ③ 斎藤信：蘭日辞典の発達について。名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」第6巻。1960。22～37。
- ④ 山本四郎：藤林晋山伝研究。有坂隆道編『日本洋学史の研究 Ⅲ』。創元社。1974。187～222。
- ⑤ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 Ⅱ——蘭学者による蘭語の学習とその研究——。早稲田大学出版部。1977。933～995。およびⅢ 対訳語彙集および辞典の研究——。1978。690～751。なお、同IV——771～785。も参照。
- ⑥ 阿知波五郎：近代日本の医学——西欧医学受容の軌跡——。思文閣。1982。221～236。
- 18) 大槻玄幹のオランダ語文法書などの資料は下記を用いた。
- ① 『蘭學凡』（1816）と『訂正和蘭接続詞考』（1825）は、静嘉堂文庫大槻文庫と京都大学文学部文学科閲覧室所蔵本。
- 19) 大槻玄幹のオランダ語文法書などの研究論文としては次を参照した。
- ① 杉本つとむ：江戸時代蘭学者語学の成立とその展開 Ⅱ——蘭学者による蘭語の学習とその研究——。早稲田大学出版部。1977。563～683。
- ② 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開 Ⅳ——蘭語研究における人的要素に関する研究——。早稲田大学出版部。1981。477～486。
- 20) ① 森島中良『蛮語箋』（1798）、奥平昌高『蘭語譯撰』（1810）、辻蘭室『蘭語八箋』（時期未詳）は京都大学文学部文学科閲覧室、高橋景保『亞欧語鼎』（1823）は国立公文書館内閣文庫の各所蔵本。
- ② 稲村三伯『波留麻和解』（1796）は京都大学附属図書館特別資料室（新宮家旧蔵）、静嘉堂文庫（大槻家旧蔵）、静岡県立中央図書館葵文庫（江戸幕府旧蔵）、東京大学総合図書館特別資料室、

早稲田大学図書館特別資料室洋学文庫（大槻家旧蔵）の各所蔵本。大槻家旧蔵のものには書き入れが多い。

- 21) 稲村三伯「波留麻和解」に関する研究論文としては次を参照した。
 - ① 斎藤信：「ハルマ和解」について。鳥取大学学芸学部研究報告——人文科学——。第2巻。1952。14～26。
 - ② 斎藤信：蘭日辞典の発達。鳥取大学学芸学部研究報告——人文科学——。第3巻。1952。25～30。
 - ③ 斎藤信：“F:Halma, Nederduits Woordenboek”。いわゆる「ハルマ和解」の異本について。金沢大学法文学部論集——文学篇2——。1954。49～58。
 - ④ 斎藤信：再び「波留麻和解」の異本について。金沢大学法文学部論集——文学篇3——。1955。60～73。
 - ⑤ 勝俣銓吉郎：ハルマ辞書について。蘭学資料研究会研究報告第32号。1958。（復刻版蘭学資料研究第2巻。1986。157～162。）
 - ⑥ 斎藤信：蘭日辞典の発達について。名古屋市立大学教養部紀要「人文社会研究」第6巻。1960。22～37。
 - ⑦ 斎藤信：「ハルマ和解」の問題点。蘭学資料研究会研究報告第114号。1962。（復刻版蘭学資料研究第8巻。1986。3～10。）
 - ⑧ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開——Ⅲ 対訳語彙集および辞典の研究——。早稲田大学出版部。1978。581～689。なお、同Ⅳ——723～756。も参照。
 - ⑨ 斎藤信：日本におけるオランダ語研究の歴史。大学書林。1985。
- 22) Halma, F.: *Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen*. Amsterdam. 1729. は長崎県平戸松浦史料博物館および静岡県立中央図書館葵文庫（江戸幕府旧蔵）の各所蔵本。
- 23) 藤林晋山「譯鍵」（1810）および廣田憲寛「増補改正譯鍵」（1857）は、静嘉堂文庫大槻文庫および京都大学附属図書館の各所蔵本。
- 24) Hannot, S. & D. van Hoogstraten: *Nieuw Woordboek der Nederlantsche en Latynsche Tale*. Dort. 1719. は長崎県平戸松浦史料博物館所蔵本。
- 25) Marin, P.: *Groot Nederduitsch en Fransch Woordenboek*. Dordrecht. 1730. は長崎県平戸松浦史料博物館所蔵本。
- 26) Doeff, H.: 『和蘭辞書和解（道譯法兒馬）』（1833）は、香川大学附属図書館神原文庫、静嘉堂文庫大槻文庫、静岡県立中央図書館葵文庫（江戸幕府旧蔵）、金澤市立図書館着館館文庫、大阪府立図書館、福井県立大野高校図書室（大野藩等旧蔵）、長野県松代真田宝物館、水府明徳会彰考館、野間科学医学研究資料館勝海舟関係資料の各所蔵本および雄松堂版マイクロフィルム『初期日本蘭佛独露文献集』（1985）のR4, R5, R6, R7, R8。
- 27) Doeff, H. 『(道譯法兒馬)』に関する研究論文としては次を参照した。
 - ① 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開——Ⅲ 対訳語彙集および辞典の研究——。早稲田大学出版部。1978。13～178。
 - ② 杉本つとむ：“ドゥーフ・ハルマ”の訳編と流伝。科学医学資料研究第100号。1982。2～10。
 - ③ 松田清：「ドゥーフ・ハルマ」初稿の翻刻ならびに『和蘭字彙』ハルマ『蘭仏辞典』との訳語対照 I. II. 高知大学仏文研究室紀要「海南手帖」2。1984。1～129, および同誌3。1986。17～115。
- 28) 佐久間象山『増訂荷蘭語彙』（時期未詳）「あ」の部は野間科学医学研究資料館所蔵本。
- 29) 桂川甫周『和蘭字彙』（1855～1858）は静嘉堂文庫大槻文庫、静岡県立中央図書館葵文庫（江戸幕府旧蔵）、京都大学附属図書館（江馬家旧蔵）の各所蔵本および雄松堂マイクロフィルム『初期日本蘭佛独露語文獻集』（1985）のR11, R12, R13。
- 30) 桂川甫周『和蘭字彙』の研究論文は次を参照した。
 - ① 今泉みね：名ごりの夢——蘭醫桂川家に生れて——。平凡社。1963。
 - ② 今泉源吉：蘭学の家 桂川の人々 正・続・最終。篠崎書林。1965, 1968, 1969。

- ③ 杉本つとむ：和蘭字彙<解説>。早稲田大学出版部『復刻和蘭字彙 V』。1974。(1)~(40)。
- ④ 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開——Ⅲ 対訳語彙集および辞典の研究——。早稲田大学出版部。1978。179~272。
- 31) 宇田川玄真：檢箴韻府。(時期未詳)は、京都府立西京商業高等学校図書室平野文庫、香川大学附属図書館神原文庫、同朋学園大学部附属図書館、国会図書館古典籍資料室の各所蔵本および雄松堂マイクロフィルム『初期日本蘭佛独露語文獻集』(1985)のR9。さらに京都大学文学部文科学科閲覧室の「蘭語助辞解残欠」とされている資料を用いた。
- 32) 宇田川玄真『檢箴韻府』に関する研究論文は下記を参照した。
- ① 京都市立西京商業高等学校図書館：京都市立西京商業高等学校所蔵洋学関係資料解題 I。1967。8~11。
- ② 杉本つとむ：江戸時代蘭語学の成立とその展開——Ⅱ 蘭学者による蘭語の学習とその研究——。早稲田大学出版部。1977。837~886。なお、同Ⅳ——561~573。も参照。
- 33) 附加されている部分のオランダ語だけを記すと次の下線の部分である。
- 「onthouden. niet geeven, aan zig houden.」
 「men moet den werk man zijn loom niet onthouden.」
 「onthouden in zijne geheugenis houden, bewaaren.」
 「zig onthouden. zig bezwingen, zig speenen. zig van alle verbodene vermaaken onthouden. zig ergens onthouden. ergens blyven met'er woon.」
 「Hy heeft hem de half van zyn loon onthouden.」
- 34) 宇田川玄真『遠西醫範』(時期未詳)、『和蘭内景醫範提綱』(1805)、『紅毛秘書 小兒諸病鑿法全書』(時期未詳)は京都大学医学部図書館所蔵富士川本。『小兒諸病鑿法全書』のスエーデン語原本およびオランダ語の訳書は未見である。Murray, J.A. のドイツ語訳 *Anweisung zur Kenntniss und Cur der Kinderkrankheiten*. Göttingen. 1785. は、野間科学医学研究資料館に所蔵されている。なお、深瀬泰旦：ニルス・ローゼン・フォン・ローゼンシュタインの小児科書(1),(2)。科学医学資料研究第220号。1992。8~12。および同誌第221号。1992。5~12。を参照。
- 35) 宇田川玄真『字韻集』、宇田川裕庵『華音集要』、同『觀自在菩薩樓檀筆』(いずれも時期未詳)は岡山県津山の津山洋学資料館所蔵本。
- ① 大友信一：津山洋学資料館蔵『字韻集』『華音集要』なるもの——その背景と評価——。洋学資料による日本文化史の研究 I。1988。1~17。
- 36) 『和蘭語韻』(時期未詳)、大槻玄幹『西音發微』(1826)、『西韻府』(1832)は静嘉堂文庫大槻文庫所蔵本。
- 37) 堀内素堂重訳『幼幼精義』米澤。日涉園蔵(1843・天保14年開扉)は武田科学振興財団杏雨書屋および京都大学医学部図書館富士川本の各所蔵本。堀内寛譯述『骨譜』(1824・文政7年)と理施蘭度原本・堀内寛・黒川良安・青木研造共訳『醫學學源』(1844・天保15年)はいずれも武田科学振興財団杏雨書屋所蔵本。
- 38) 堀内素堂に関しては下記を参照した。
- ① 富士川游：堀内素堂先生。中外医事新報第330号。1893。51~54；堀内素堂先生。中外医事新報。第865号。1916。426~430。
- ② 堀内亮一編：堀内素堂。杏林舎。1932。
- ③ 堀内亮一：高野長英先生と堀内忠亮。日本医事新報第598号。1933。393~394。
- ④ 杉本勲・池田哲郎：長野市の蘭書——犀比館と県立長野図書館蔵——。蘭学資料研究会研究報告第26号。1958。(復刻版蘭学資料研究第2巻。1986。55~63。)
- この論文では、ここにある Huffeland : Pathogenic. 1799. の手稿 4 冊について「堀内素堂の原本はこの版である」とされているが、現在、長野市の真田宝物館に移管されているこの資料は『幼幼精義』の原本ではない。原本の刊行年は1798年で、これまでの調査では日本に見在していない。
- ⑤ 堀内文書目録稿。日本医史学雑誌第16巻第3号。1970。59~67。

- ⑥ 片桐一男：堀内文書の研究（一），および堀内家略系図．日本医史学雑誌第16巻第4号．1970．59～68．
- ⑦ 酒井シヅ：堀内文書関係年譜．日本医史学雑誌第18巻第1号．1972．39～50．
- ⑧ 堀内淳一：米沢藩医堀内家とその周辺．日本医史学雑誌第18巻第1号．1972．17～28．
- ⑨ 小川鼎三：堀内文書にみる蘭学者の生活と思想——第一回杉田玄白の手紙から．日本医史学雑誌第18巻第1号．1972．1～10．
- ⑩ 大鳥蘭三郎：堀内文書に見られるオランダ語について．日本医史学雑誌第18巻第1号．1972．11～16．
- ⑪ 片桐一男：堀内文書の研究1～10．日本医史学雑誌第17巻～第20巻．1971～1974．所収の文書を参照．
- 39) Hufeland, C.W. : Bemerkungen über die natürlichen und geimpften Blattern, verschiedene kinderkrankheiten, und fowohl medizinische als diätetische Behandlung der Kinder. Berlin. Bey Heinrich August Rottmann. 1798. 256～279. 本書は Berlin, Bücher. Internationaler Leihverkehr. よりの借用本によった．
- 40) Saxe, J.A. : Waarneemingen over de natuurlijke en ingeente Kinder-Pokjes, over verscheidene ziekten der kinderen, en zowel over de geneeskundige behandeling, als over den Leefregel der Kinderen. Utrecht. G.T. van Paddenburg en Zoon. 1802. 241～263. 本書は Drukwerk, Universiteitsbibliotheek van Amsterdam. より京都大学附属図書館相互利用掛を通じて寄贈されたコピー版によった．
- 41) S. Hopfengärtner über die menschl. Entwiklungen und die mit denselben in Verbindung stehenden Krankheiten, 1792.
- 42) 上杉鷹山：輔儲訓．1775．（山住正己・中江和恵：子育ての書）1．平凡社東洋文庫．1976．105～113．
- 43) 杉田玄白：解體新書．1774．は，小川鼎三監修・酒井恒訳編：ターヘル・アナトミアと解體新書．名古屋大学出版会．1986．585～599．ここでは「而化^シ水穀^ヲ」とか「其汁^ノ至^テ此^ニ而長^ス」となっている．
- 44) 宇田川玄真『和蘭内景醫範提綱』（1805）は京都大学医学部図書館富士川本．
- 45) 緒方洪庵『扶氏經驗遺訓』（1858～1861），青木浩齊『察病龜鑑』（1853），山本美致美『扶氏診断』（1858）は京都大学医学部図書館富士川本．
- 46) 坪井信良『侃斯達篤内科書』（1864）は京都大学医学部図書館所蔵富士川本．
- 47) 新宮涼庭訳・羽戎歌郎突『泰西疫論』（1824，1835）は京都大学医学部図書館所蔵富士川本．
- 48) Hufeland, C.W. の生氣論医学とその蘭医学への導入については下記を参照した．
- ① 阿知波五郎：日本医学近代化の歩み（第13回）生氣論医学受容期（1820～1855）——C.W. Hufeland（1762～1836）の影響（Ⅰ）——．Modern Medicine. 1975. 1. 77～82.
- ② 阿知波五郎：日本医学近代化の歩み（第14回）ドイツ生氣論医学受容期（1820～1855）——C.W. Hufeland（1762～1836）の受容（Ⅱ）——．Modern Medicine. 1975. 2. 113～117.
- ③ 阿知波五郎：医史学点描．思文閣出版．1986．319～328．
- ④ 石田純郎編：蘭学の背景．同朋舎．1988．
- 49) 高野長英『西説醫原樞要』（1832），小関三英・工私蒲略偈『内科集成』（時期未詳）は京都大学医学部図書館所蔵富士川本．
- 50) 罹浮陳輯訂：鼎鑊幼幼集成．積秀堂蔵版．1750．京都府立総合資料館所蔵本．
- 51) 中村昭：緒方洪庵『扶氏經驗遺訓』翻訳過程の検討．日本医史学雑誌第35巻．1989．229～260．
- 52) 田中昌人：蘭学における発達の概念の導入について——内田正雄『和蘭學制』（1869）まで——（未刊）